

明日あすへのボルト・ナット

菊野 啓

百五十枚

改造したりヤカーに車椅子を乗せてみた。幅も奥行きもぴったりだった。わずかな隙間に、生活用品や画材を積むことにする。

「どうだい？安定してる？」

僕は狭い美術室のフロアで、リヤカーを前後させながら聞いた。

「オツケー。最高の乗り心地だよ」

車椅子に座った日下幸太は上気した頬を輝かせた。

明日から高校最後の夏休みに入る。今回の旅を発案したのは幸太だった。

「本物の景色を眺めながら絵を描きたい。完全に動けなくなる前に旅をしておきたい。生きた自然を目に焼き付けておくんのだ」

強い願望を口にした。幸太から頼み事をされるのははじめてだった。病気になる前は一年中、絵の道具を荷台に積んだ自転車でもどこにでも出かけていた。

筋萎縮性側索硬化症「ALS」という難病だった。体中のすべての筋肉が萎縮し、筋力低下をきたす。歩くことも立つこともままならず寝たきりになる。やがて人工呼吸器に繋がれ、会話を失う。さらに麻痺が進むと唼ひとつ動かせなくなり、意思の疎通を完全に絶たれてしまう。五年ほどで半数が、呼吸筋麻痺により死亡するという。原因不明で有効な治療方法は未だ確立されていない。

一年ほど前に発症して、症状は急速に進行した。いったいどんな思いで、突然ふりかかった業病と向き合っているのだろう。僕には想像もつかなかった。

幸太はあいかわらず絵を描き続けていた。車椅子にはなったが、まだ筆を握ることはできた。しかし、戸外に出る機会は減り、部屋に籠もることが多くなっていた。

彼が得意とするのは風景画だった。おもに水彩で、不思議な透明感と空間の広がり特徴的だった。

彼の絵を見るたびに、僕は新鮮な感動を覚えた。その画面に取り込まれ呼吸している自分に気付く。河原に咲き誇る菜の花畑の前で、あるいは並木道に覆い被さる桜の木の下で、爽やかな風になぶられていた。いつまで眺めていても飽きなかった。

絵自体の持つ奥行き深さが並々ならぬ力量を示している。失われるにはあまりに惜しい才能だった。だから、この親友の願いをかなえるために一役買うことにした。

「うわあ、素敵」

旅の同行を予定する三崎真琴が興奮しながらやってきた。肩までかかる柔らかな髪の毛が艶やかに光っている。

「ほんと、かっこよく出来上がったわねえ」

一緒に入ってきた内田晴美は、外側にベニヤ板を張りポップな彩色を施したりヤカーを見て顔をほころばせた。

美術部顧問でもあるクラス担任の教師で、小太りな体をいつも黒いスーツに押し込んでいた。化粧が下手くそなせいで、いつも眼の周りを黒い輪っかに塗っている。就任早々、ポンコのあだ名が定着していた。

幸太が疲れたときはリヤカーに乗せる、というのは彼女の提案だった。取っ手を引きやすい形状に変えたり、持って行く荷物を選ぶのにも細かなアイデアを出してくれた。

病人を連れ、一週間も行き当たりばったりの旅をするという計画だった。道中、作品の素材を拾い集めたり、記憶に留めるべき美しい場所を探す。気ままに美術品の制作やスケッチをしながら、隣の県まで徒歩で進む予定だ。

当然強い難色を示す親たちを、自分が責任を持つからと根気よく説得してくれたのも彼女だった。この旅の意味を、他のどの大人よりも深く理解してくれていた。

「無理はしないこと。途中いろいろな判断は、山野君の指示に必ず従う。いいわね」

全員にポンコは念を押し、自分の携帯電話の番号を控えさせた。

「わかりましたあ」
ほとんど聞いてない真琴が答え、旅への期待で幸太と盛り上がりはじめた。

天気予報は夏真っ盛り的好天を伝えている。僕たちは最初でたぶん最後の美術行脚に、遠足前夜の子供たちみたいな胸の高鳴りを覚えていた。

太陽の出現を待ちわびて出発した。荷物を積んだリヤカーを僕が引き、幸太の車椅子を真琴が補助する。

創作の材料を拾いながら歩く。何でもよかった。「無」から何かを生み出すというのが僕のテーマだった。

早朝からすでに暑い。リヤカーは思ったよりずっと重かった。ぼたぼたと汗が落ちた。

足を踏ん張り張り地面を睨んでいると、アスファルトの上で光っているものに気付いた。あちこちに落ちていている。道路を往来する車などの機械から落ちたボルトやナットだった。あるアイデアが閃いて、僕はそれらを拾い集めることにした。

県道を伝い、車のいない土手に上がった。川沿いを延々遡上すると県境に出ることができ。僕たちが選んだベストのルートだった。

生ぬるい空気を全身で押し、すっかりした足取りで歩む。上から見下ろす川面は、きらきらと鏡のように輝いていた。土手の下に

は花見の名所となる桜の並木が一キロ以上も続いている。緑の葉をつけた木々の間を、真夏の風が吹き抜けていった。

三人ともツバの大きな麦わら帽子を被り、タオルを肩にかけている。ポンコの勧めによるスタイルだった。けっこう気に入った。弾む会話を楽しみながら、美しい景色に酔いしれている。世界中が僕たちに微笑みかけているような心地良さを味わっていた。

うろこのような石積みの上を、白いしぶきを上げて水が流れている。秋には鮎が遡上するという堰が見えた。

「本日のアンカーポイントにしよう」

僕はリヤカーを止め、今日の創作場所をここに定めることにした。

「賛成。ほんとにきれい」

真琴が小さな拍手をして、大きな伸びをひとつした。ちよつと突き出た前歯が、いたずらなりスみたいに見える。小柄だがTシャツの下の両胸は真っ直ぐ前に突き出していた。ときに目のやり場を探すはめになる。

道具を出してスケッチをはじめた。携帯の折りたたみ椅子を並べ、画用紙の上に眼下の自然を写し取っていく。しだいに夢中になった。

「へえ、おまえら何やってんの？」

背後から聞き覚えのある声がした。驚いて振り返ると横田透が立っていた。

「あれ、横田こそこんな所で？」

自宅謹慎のくせに出歩いていいのか、と言いかけてやめた。夏休み前の新聞紙上をにぎわしたローカル三面記事が記憶に新しい。

「ふん、誰にも言うなよな」

ふてくされた顔でそっぽを向く。毛先をわざと不揃いにカットして跳ね上げた髪の毛の乱れを気にしている。

「どうにも退屈でさ」

長身を折り曲げて幸太のスケッチを覗き込む。ほう、と感嘆の声をあげた。その出来映えは、誰が見てもずば抜けている。

「おまえ、サッカーやめちゃうのか？」

透とは中学時代の同級生だった。同じ高校に進学したが、クラスが離れ付き合いは薄れていた。彼はサッカー部のキャプテンであり、おまけに成績も抜群の健康優良児だった、はずだ。

「やめるもなにも、部そのものがどうなるかわかんないや。俺たちの反社会的行為のおかげでね」

他人事みたいに肩をすくめてみせる。

「聖徳高校サッカー部集団万引き事件」が明るみに出たのは夏休み直前だった。十人前後関与、一年で五十万円以上、手口巧妙組織的犯行、傷ついた伝統、何度も新聞に取り上げられる。生徒たちの罪悪感の欠如や学校の対応の遅れが俎上に乗せられた。

全国高校選手権に全国最多四十回の出場を誇る名門校で起きた不祥事は、県民の耳目を驚かせた。処分も曖昧なまま、透たちは休部および自宅謹慎中のはずだった。

「あんたたち、ほんとにお馬鹿なことしたもんね」

早々にスケッチを切り上げた真琴が言った。

「ほっとけ、おまえに言われたかないね」

手にしたペットボトルの水をあおる。

「まったく、アホね。あんた、賢そうなわりに。母校の名を汚した反省くらいしなさいよ」

「うるさい。伝統だの、誇りだのって言われるとむかつくね。試合に勝ってる間はちやほやしてたくせに」

土手の斜面の草原に勢いよくツバを吐く。

「ところで、おまえらは何してるのかって？ えらい荷物引いちゃって。なんだ、この行商に行くみたいなのは？」

好奇心旺盛な犬のように鼻をひくつかせている。僕はこれから数日の美術行脚の計画を話してやった。

「ふうん、それってちよつとおもしろそうかも」

再び幸太のスケッチに眺め入っている。休まない筆が、どんどん絵を仕上げていく。

「なあ、俺もついていっていいかな？」

「ダメ」

真琴が即座に却下した。

「おまえにきいてねえよ。山野に頼んでんだ」

一人で引いてきたリヤカーの予想以上の重さに、早くも自信を失いかけていたところだった。

「これ、引くの手伝ってくれるか？」

「決まり。やりますとも」

謹慎中の万引き部員が親指を立ててみせる。

僕はこの男が嫌いではなかった。常に成績は上位、運動させればそれも抜群の優等生の横顔には、いつもある種の欠落感が浮かんでいた。なぜなのかわからない。それがなんとなく親近感を覚える要因だった。

「あああ、だめだ。全然なっていない」

いきなり幸太が、ほぼ出来上がったスケッチをびりびりと破いた。

「うわ、もったいねえ」

風に舞う画用紙の切れっ端を、あわてて透が追いかける。

「うまくいかないよ。何かが決定的に足りないんだ」

黒縁の眼鏡を神経質にいじる。痩せ細った手首が鳥の骨のようにか細い。筋肉の量と張りが少しずつ失われていくのを、ここ半年ほど間近で見してきた。

「もう時間がないっていうのに。この体が動かなくなる前に、なんとかしなくちゃならないのに」

苛立ちをストレートに体现する幸太の姿に、三人は言葉を失う。あまりにも苛酷な病気に肉体を蝕まれる苦境を知っている。

「焦るなよ、幸太」

自分で口にした慰めの、あまりの軽々しさに辟易した。

「なあ、日下。俺が見るところ、おまえの絵は相当にすごいと思うけどな。本当の芸術がわかってないと言われりやそれまでだが」

拾い集めた画用紙を手にして透が言った。

「だって見るよ。こいつのこの下手くそな絵」

目にもとまらぬ早さで真琴のスケッチをひったくり、頭上に掲げた。「どんなに芸術音痴の俺でも、これが幼稚園児並みだったのはわかるよ。これに比べりゃ、おまえはピカソだぜ」

ぶははは、と笑う。

「このやろう、返せ」

激怒した真琴が腕を振り上げる。大人と子供ほどある身長差のせいで、よくあるギャグのようにまるで届かない。絵を頭の上にかざしたまま走って逃げた。

「ごめん、真一。八つ当たりして悪かったよ」

時間がないという幸太の言葉が、鼓膜の上で転がっている。僕の親友を救う者はどこにもいない。

急に胸が塞がれる。僕が彼にしてやれること、そして彼が僕に残してくる大切なもの、この数日の持つ価値が胸に落ちる。まだ始まったばかりの旅の行く末を案じるには早すぎた。

再びリヤカーを引いて歩き始める。一人増えた旅の道連れは、力自慢のスポーツマンだった。

昼をとうに過ぎ、頭上の太陽は容赦なく激しく照りつけてくる。露出した皮膚を傷つけようと、目に見えない紫外線のナイフを振りかざした。

「ふええ、あっちいよお」

空になったペットボトルを握りつぶしながら透がぼやいた。

「なんなの、サツカー部員でしょう。万引きのやりすぎでなまっちゃってんじゃないの？」

絵をけなされた恨みを忘れていない。

「おまえこそ美術部員のくせに、あの絵じゃあな」

鼻で笑う。真琴は元々少しとんがった唇をさらにすぼめた。角張った顎を腹立たしそうに膨らませる。

「いうな」

彼女の真骨頂は彫塑だった。造形作家を目指していた。たしかに二次元的なデッサンはあまり得意ではない。

炎天下の行軍が始まった。土手の上を抜ける風はもはや熱風と化した。流れる汗がみるみる蒸発していく。皮膚の表面を薄い塩の層が被う。干からびる寸前のカエルになった気分だ。しだいに皆、無口になった。

そのとき、ピロピロと誰かの携帯が鳴った。

「はい、わたし」

不機嫌をさらに煮詰めた声で真琴は背を向けた。

「だから、知らないって。わざわざ電話かけてこないでよ、ママ」
投げやりな対応は母親に対するものらしい。

「そんなことくらい自分でなんとかしておいてよ。しばらく帰らない。そう言ったでしょう？」

愚痴りながら乱暴に電話を切る。

「ほんとうに、うざい」

うっとうしそうに髪の毛を跳ね上げる。

「どうしたの？」

真琴の母親を思い出しながら聞いた。

一度だけ美術部の用事で立ち寄ったとき、母親がまだ寝惚けた顔でドアを開けた。黒いシュミーズから肉付きの良い白い肩がはみ出している。裸足の足の爪に塗られた真っ赤なペディキュアが視線を誘った。僕は赤くなってもじもじしていた。

慌てて奥から出てきた真琴はバツの悪い顔をして、突然の訪問を非難した。乱れた髪を直そうともせず、母親は意味のわからない含み笑いを残して部屋の中に引っ込んだ。

県営住宅に住む母子家庭だった。数年前に県外から引っ越してきた。母親は街の繁華街で小さなスナックを営む。どんな遍歴でこの街に流れ着いたのかわからない。

その店の常連客の多くは、僕の住むアーケード街の店主たちだった。おかげでいろいろな噂を耳にすることになった。

なにかにつけて愛嬌の過ぎるママの行動が、ゴシップ好きの客たちの間で物議を醸す。彼らの話はいつも、うんざりするほどろくでもない。危機感のない経営者たちの多くは二代目三代目で、シャツターを下ろす店も増える一方だ。

「今夜のおしぼりを用意できてないだって」

高校生の身で接客することはなかったが、真琴は店の裏方を手伝っていた。

「まったくいいかげんにしろっつーの」

白い肌や背格好、顔つきも当然母親に似ている。おぞましいものを払いのけるように首を振った。

「子離れしない親ってどう思う？」

返す意見を思いつかない。

「親離れの早すぎる子供を理解しろっていうのは無理だよ」
透が横から口を出した。聞いていたとは思わなかった。

「あんたんとこは大金持ちのセレブでしよう？」

大きな外科病院を経営する医者の一息子だった。

「金があっても愛はない。愛がなければ家もない」

変な節回しで言う。

「家がなければ旅に出よう」

真琴が同調した。

「袖振り合うも多生の縁。さあさあ、旅を続けましょう」

透が透き通った声を川の上に投げる。なんのこっちゃとみんなで笑った。

細かい砂利の道を、リヤカーと車椅子合わせて四つのタイヤが細かい轍を残して進む。誰も顧みない僕たち四人の歩みみたいな痕跡だった。今夜の宿もまだ決めていない。寝袋もあるし、どうにかなるさと思っていた。

少し無理のある僕の樂觀は、やがて見事に打ち破られる。晴天にわかにかき曇り、ぎらつく太陽はそそくさとどこかへ顔を隠す。入道雲がもくもくと、じつとりと汗ばむ湿気を連れてきた。打ち水のごとき立たなら歓迎であったが甘かった。

どしゃつと頭上からなまあたかいかい雨が落ちてくる。バケツどころかプールの底が抜けたほどの勢いで水を被る。おまけにごろごろと気味の悪い雷鳴が、すり足で近付いてきた。

「急げ。雷が来るぞ」

慌てて車椅子をリヤカーに乗せた。透が取っ手を引き、僕が後ろから押す。真琴は横から幸太を支えた。

「走れ！」

どこにも隠れるところのない土手の上を、一目散に駆けていく。リヤカーがどすどすと路面の凹凸で揺れた。

雨足はさらに強くなり、視界が奪われる。水煙の立つ川の上に、ぴしゃつと細くしなる鞭のような稲妻が閃く。僕たちの頭を狙って追いかけてくる。

「うわあ、おっかねえ」

ひときわ大きな穴ぼこにはまってリヤカーがかしいだ。とたんに透が歯を食いしばっても進まないほど遅くなった。リヤカーの片輪がパンクしている。

「かんべんしてよ。誰かの行いが悪いせいよ」

真琴が濡れたおでこを剥き出しにして叫ぶ。

「俺か？俺のせいだよ」

伸びきったバツタのように、渾身の力でリヤカーを引く透がわめく。
「おろしてよ。僕が悪いんだ。無理を言い出したのは僕だから」

幸太の声は風雨にかき消されて飛んでいった。

「やっぱりあたしも謝ります」

「計画した僕も甘かった」

とうとう全員に泣きが入った。おかまいなしに悪魔の舌みたいな稲光が暴れている。地鳴りと雨音が耳を聳した。

何かに罰せられている気がしてきた。なんに対する罪悪感なのかわからない。それでいいのかと問うてくる誰かの声が聞こえる。まるで解決の見えない苦悩を、むやみやたらとかき回していた。

突然発生した夏の嵐は、僕たちを糾弾し続けた。豪雨の作る紗幕の向こうで、底意地の悪いピエロが舌を出して笑っている。

恭順にひれ伏す準備はまだ整っていない。戸惑いと苛立ちが、魂の表面をけば立たせるだけだ。

十八歳、いま人生のとぼ口に立つ。いやが応でも何かを選択せねばならない卒業の時間が迫っている。目の前に現れたどのドアをノックすべきか、誰も教えてはくれないことを知っていた。

2 橋の下の邂逅

溺死寸前の金魚さながら延々と雨中行軍を続けた。どこにも逃げ場はなかった。何時間も前を見据え力を振り絞った。何かに試され、刃向かっている気がした。

荒れ狂う風雨を避ける場所をやっと見つけた。ほうほうの体で中央橋の下に潜り込む。息も絶え絶えにへたり込んだ。

「死ぬかと思った」

透がシャツを脱いで絞った。露わになった精悍な筋肉を、車椅子の幸太が眩しそうに眺めている。

「麦わら帽子がつぶれちゃった」

帽子を脱ぎ、真琴は濡れて絡まった髪の毛を梳いた。肌張り付くTシャツから浮き出る下着のラインが艶めかしい。丸い肩やむっちりとした二の腕が、かつて見た母親の姿とダブる。僕は誰にも気付かれないように、目を閉じて頭を振った。

「泳いだと思えばいいよ」

川から上がったばかりの河童みたいな幸太が呑気に言う。眼鏡が雨滴で曇ったままだ。

「なんにしても想定外だったよ。まいったな」

リヤカーのパンクをどうしようかと考えている。スペアタイヤを持ってこなかったのは失敗だった。

太陽は分厚い雲に隠れたまま、山の向こうへ退場していった。遅い夏の夕暮れが迫っていた。

宿を探すにしても、これ以上一メートルも動けそうになかった。

風は弱まったとはいえ、まだ大粒の雨が曇天から落ち続けている。そのとき、背後から野太い声がした。

「よお、こりやあ元気なやつらがきたもんだ」
ぎよつとして振り返る。

誰が置いたかわからない色の剥げかけた赤いベンチに、男が一人座っていた。薄汚れた青い花柄のアロハシャツに白い半パン、ビーチサンダルを足の爪先にぶら下げている。

「とここで兄ちゃん、タバコ持ってねえかな？切らしちゃってね」
ぼさぼさの髪の毛もじゃもじゃの口髭が、顔のほとんどを覆い尽くしている。

「残念ですが持ってません。僕たちは高校生・・・」

僕が言い終わるより前に、ほらよと透がポケットから煙草とライターを取り出した。

「おっ、わりいね」

上半身裸のままの透は男に近寄り、煙草に火をつけてやった。自分も一本抜き、吸い始める。

「うう、うめえ。ひさしぶりのニコチンだあ」

男は感じ入った顔で、肺一杯に吸い込んだ煙を鼻から一気に吹き出した。

「ほんと、こたえられねえ」

透が男の口調を真似ている。

「ダメだ、こりや。まったく更正の意志なし」

真琴が肩をすくめる。

「ほっとけ。俺は俺のやりたいようにやるさ」

長い二本の指にはさんだ煙草を悠然とふかす。

「おう、やれやれ。元気がいいのがいちばんよ」

わけもわからずに、男がはやす。

ホームレスかと思ったがそうではないらしい。潤いのあるふたつの瞳と口元からのぞく白い歯が、ただの老人ではないことを告げている。定かな年齢は読み取れない。四十歳にも六十歳にも見える不気味な風貌だった。

ベンチの後ろには、男のものらしい青いホンダ・スーパーカブが停められている。カブの後部には大きなポリ製の荷箱が積まれ、さらに重ねて大小のザックがゴム紐でくくりつけられていた。行人には見えない。

「あなたはここで何をしていますのですか？」

男の強い視線に気押されながら聞いた。

「何もしてないね。強いて言えば、犬を観察している」

「犬？」

男が顎で指し示す方向に目をやる。橋の下の真ん中あたり、生い茂

った雑草の中に毛の生えた丸い背中が見えた。

「けっこう大きな犬だわ」

伸び上がって真琴が見やった。皆で遠巻きに眺めていると、グレーの毛に覆われた生き物が、突然咳き込んだ。苦しそうに嘔せる。

「どうしたのかしら？」

心配そうに、観察しているという男の顔を窺う。

「病気だな。癌か何かかもしれないねえ。たぶんもうそんなに長くないだろうよ」

根本まで吸った煙草をもみ消しながら、男はあっさりと言う。

「犬にも癌があるの？」

癌という響きに幸太が反応した。

「そりゃあるさ。横腹のあたりに大きなこぶができてる。それが内臓を圧迫してるんだらうね。ずっとゼイゼイいつてる」

獣医じゃないからわからないが、と男は付け加えた。

「あなたは病気の犬を眺めているの？」

「ヒマなもんで」

煙草をもう一本ねだった。

「シベリアン・ハスキーだよ、この犬」

車椅子でそろそろと近付いた幸太が弾んだ声をあげた。

確かにハスキー犬と呼ばれる立派な種類だった。三角の耳や円錐形に尖った鼻、精悍な顔つきをしている。オオカミに似た大型犬がなぜこんな所にいるのかわからなかった。グレーの毛は泥で汚れ、艶を失って乾いていた。

三人で近寄ろうとしたとき、うずくまった毛の塊が唸り声をあげた。獐猛そうな威嚇に、びくつとして足を止める。

「なんだか怒っている？」

顔を見合わせた。

「捨てられちゃったのよ、きつと」

「病気になったから？」

「わからない、でも飼い犬だったことは確かだね。ほら、首輪の跡があるもの」

病気で死にかけた犬の首輪を外し、橋の下にうち捨てる飼い主の心ない仕打ちを思った。

「だから人間を恨んでいる？」

幸太はあきらめずに、ほんのわずかずつ犬に近付こうとしている。

「一時、マンガかドラマがきっかけで大流行したよね。ハスキー犬ブームってあったらう？」

あったあつた、と皆で首肯する。

「もともとシベリアかどこかのツンドラ地帯で、エスキモーが橇を引かせるために使う犬なのにさ。蒸し暑い日本に連れて来られてい

つせいに繁殖させられた。どこのペットショップでも高値で売られてた。流行が去った今、増えすぎた犬が保健所に持ち込まれて殺処分されてるんだってさ」

透がすらすらと百科事典並みのうんちくを並べた。

「人間ほど自分勝手に傲慢な動物はいないよ」

「あんたが言うか？」

犬がはじめて顔を上げて僕たちを見た。黄色い牙を見せて鈍い怒りを発してくる。口から乾いた舌が垂れ下がり、苦しげな呼吸が不規則に途切れる。

「病院に連れて行こうか？」

強い引っかかりを見せる幸太が提案した。

「おまえらの世話にはならねえよ。この犬は」

いつのまにか男が背後に立っている。背は高くないが、肩幅が広くがっしりした体格をしていた。

「自分の命が尽きかけていることを知ってるんだ。そっとしといてやんな」

穏やかに諭した。

「犬の心がわかるの？」

「すこしはな。通じるようになってきた」

一週間ほど前からこの橋の下で野宿しているのだという。その時から犬はそこにいた。ときどき餌を投げてやっている。

「こいつは自分の病気のこと、命が終わろうとしていることも全部わかってるよ。けっこう賢いやつなんだ」

「ひとり、ここで死のうとしてる？」

幸太は犬のことが気になるようだった。

「そういうこと。自分の状況を受け入れて、この世から静かに消え去ろうとしている。だから、よけいなことはするなってこった」

小さな口笛を吹く。ハスキー犬はちらりと目を上げたが、すぐにまた顔を伏せた。

「なぜ、そんなことができるの？ 病気になって捨てられて、苦しみながらひとり死んでいくのを運命だなんて、どうして平穏な気持ちでいられるの？」

自分の状況を重ねているにちがいない。

「僕には病気を受け入れるなんてことはできない。なぜ、自分だけがこんなめにあうのかわからない。誰かのせいなのだとしたら、とうてい許せない」

苛酷な自らの病について、感情を爆発させるのをはじめて見た。強い意志で押さえつけてきたのだと今さらのように知る。

「どうだかなあ？ 犬に聞いてみなきゃわかんねえや」
腕を組んで首を傾げてみせる。

「なんにしても、自分の寿命ってもんはどうにもならねえ。誰のせいでもない」

幸太の病状を見通しているのだろうか、男は逃げずに問答を続けている。

「たとえ自分の気持ちとは折り合いをつけることができたとしても、家族や周囲の人に迷惑をかけるのが我慢できないんだ」

曇ったままの眼鏡のせいで表情は読めない。
「お母さんは長く勤めていた生花店を退職して、僕の介護に付きつきりになった。あんなに好きだった仕事をすっぱりと辞めたんだ。慣れない介護に腰を痛めて寝込んだりするし。周りの人間まで不幸にしてしまう」

悔しそうに顔を歪める。

幸太は母親と二人で小さなアパートで暮らしている。交通事故で父親を早くに亡くし、母一人子一人身を寄せ合って暮らしている。母親は商店街の生花店に勤めて生計を立ててきた。貧しいけれども妬み嫉みとは縁遠い心を、二人とも維持している。

母親は小柄で柔和な丸顔で、笑うと雀斑のある鼻の横に皺が寄った。仕事から帰ると、店で捨てるはずだった花を小さな花瓶に生ける。部屋中にほんのりといい香りが漂った。

僕は幸太の家に遊びに行くのが大好きだった。しょっちゅう二人で絵を描いた。

彼女は僕の絵をいつもやたらと褒めてくれた。褒め上手の中に、きちんとしたアドバイスをはさんでくれる。花々の儂い美しさに長年触れているうちに、絵画を見る勘所を会得したのかもしれない。幸太が花のある風景画を好んで描くのは、この母親の影響にちがいない。

幸太が難病を患ってからは仕事を辞め、生活保護と公的な支援を受けて看病に専念していた。このけなげな親子がなぜ、恐ろしい呪詛の標的に選ばれねばならないのか。世の中のどんな不公平にもこんなひどいものはあるまい。

それでも彼らは明るさを失うことはなかった。誰を恨むこともなく、我が身にふりかかった災厄を宿命と受け止めているかに見えた。なおも前向きに生きようとしていた。

幸太は母親や僕の助けを借りて、できるかぎり登校した。なんとかきちんと高校を卒業したい、と言った。そして学校でも家でも、ほぼ毎日絵を描いていた。

「治る見込みはないんだ。だったら寿命とやらをもっと縮めてもらったほうがいいかなって。なんの役にも立たないくせに、誰かの人生を奪うだけのために生きててもしかたない。さっさと強制終了してもらいたい」

あの母親がそれを望むわけではないと思った。でも、言えなかった。幸太の真っ直ぐな気持ち、上っ面だけの言葉を拒絶する。

「まともな母親がそんなこと気にするかねえ。わが子を不憫に思うことはあっても、邪魔だとか面倒だとかは思わねえよ」

突如、男が僕の気持ちを代弁した。

「子供ってのはさ、親にとってみりゃ、ある意味いつまでも子供のままなのよ。障害や病気があって動けなかったも、かわいい赤ん坊が図体だけでかくなつたようなもんだ」

言わんとすることの意味が、温かく耳を濡らした。

「だから飯を食わせたり、下の世話だっけいとわない。おめえの病気がどんなだかはよく知らないが、引け目を感じる必要はないさ。むしろ相手をよけいに悲しませる。自分の人生を奪われたなんて思うわけがねえ」

男の言葉には、ささくれた心をオブラートでくるむ柔らかさがあった。だから、黙って聞いていた。

「幸太、そのために絵を描くんじゃないのか？」

思いついて僕は言った。

「うん、日下の描く絵はきっと誰かの役に立ってるよ。お母さんの気持ちも癒されてると思う」

透は拾った石ころを意味もなく川に投げた。

「そうだよ。私もそう思う」

真琴が口をはさみ、一瞬だけ複雑な表情をよぎらせた。自分の母親に被せた思いを素早く引つ込める。それを僕は見逃さなかった。

「絵もうまくいってないよ。焦るばかりで何かが足りない。どうやったらいいのかわからないんだ。それに、もうすぐこの手も動かなくなる」

溜息とともに肩を落とす。刻一刻と幸太の全身の筋肉組織から機能を奪いつつある難病の無慈悲さを呪った。

「こいつの絵に比べりゃ、おまえはセザンヌだっけ」

透はしつこい。

「うるさい」

また背丈のちがいきるボクシングが始まった。

「ほう、おまえら絵を描くのか？」

フケだらけの脂ぎった髪の毛をぼりぼりとやる。

「ええ、高校の美術部員なんです、僕たち。創作のための旅の途中なんですよ」

美術行脚の話伝えた。画材を積んだりヤカーを見せる。

「こいつだけはサッカー部の万引き少年ですけど。謹慎中なのに、家を抜け出してふらついてるんですよ。よかったら警察に通報しちゃってください」

真琴が逆襲する。ふんと鼻を鳴らして、透はまた煙草を吸った。

「警察？冗談じゃねえや。警察と病院ほど嫌いなものはねえ」
男はぶるぶると唇を震わせてみせる。

「指名手配中だとか？」

得体の知れない男と、昔からの知り合いのように話している。いつのまにかうち解けていた。

あらためて僕たちが自己紹介すると、自分は春本だと答えた。名乗るほどの者じゃないが、とやたらニヤけている。

すっかり陽が落ちた。春本は青いスーパーカーブに積んだ荷箱から、小さな携帯用のオイルランプを出して火を灯した。次に簡易コンロを取り出し、小さな鉄鍋にペットボトルの水を入れて沸かす。ビニール袋の中から何かの粉末を鍋の中に落とす。

とたんによくおいが河原中に漂った。離れたところでうずくまるハスキー犬が、ごそごそと動く気配がした。

「そらよ、精がつくから飲んでみな」

アルミのマグカップに移し、湯気のためスープみたいなのを手渡ししてくれた。僕たちは順番に回し飲みした。

「うわあ、おいしい」

揃って感嘆の声をあげる。

「これなんですかあ？」

「アフカンモスキートの目玉だ。スープにして飲むと目がよくなる。視力が向上するだけじゃなくて、色の感覚が鋭くなってくるんだ。

絵を描くんならこれを飲め」

春本は得意げに言った。手にしたコップに目を落とすと、無数の黒いゴマみたいなのが浮いている。

「モスキートって、蚊の目玉のこと？」

ぶーっと透が吹いた。

「アフリカに行ったことがあるんですか？」

幸太は眼鏡の下の両眼をしきりにこすった。早くも効果が出ているのかもしれない。

「ああ、若いときにな。おめえらより、もうちよい歳のいった頃かなあ。タンザニアのダルエスサラームという田舎町で、三年くらい暮らしたことがあるんだ」

どうだすげえだろ、と胸を張る。何がどうすごいのか、それ以上は話さない。

持参していた缶詰とパンを、みんなで分けて夕食にした。春本とともにここで野宿することに決めた。無性に腹が減っていた。

誰もが旺盛な食欲を發揮した。油の浸みた缶詰のコンビーフを、春本は指で掴んでもしやもしやと食べた。それにつられて全員手づかみで、目の前にある食い物を口の中に放り込んだ。くちやくちや

と咀嚼する音が、ぴたりと会話を止める。

ふと思いついた。犬は素直に前脚で立ち上がり、ぱくりと食べる。礼を言うように、くうんと鳴いた。

そのとき、誰かの携帯が派手なロックを奏ではじめた。

「もしもし？」

押し殺した声で透が答えた。携帯片手に遠ざかる。

「まだ食欲はあるみたい。全部食べた」

真琴がうれしそうに言う。

「僕の分もやってきて」

幸太が千切ったパンを差し出した。再び犬のもとへ向かう。

「うるせえよ、ジジイ。搜索願だと？ふざけたことすんな」

透の怒鳴り声が響き渡った。電話の相手は父親らしい。自宅謹慎の身では追っ手がかかって当然だ。

「ほっとけよ。どうせあんたの言うことはウソばっかだろ」

ぶち切れていた。あたりかまわずわめき散らし、ぞんざいに電話を閉じる。

「どうした？万引き少年」

指を舐めながら春本が聞いた。

「おっさんには関係ねえよ」

苛立ちをしまい込めずに噛みつく。

「そりゃ、ごもつとも」

もぞもぞとアロハで手を拭く。

「まあ、そうとんがらずに一服しようぜ」

食後の煙草が欲しかったのだ。

「わかったよ。ほら、やるよ」

煙草とライターを放り投げる。

「お、サンキュー。お礼に人生相談にのってやってもいいぜ」

ぱしゅつと火をつけ、ふうふうとふかす。

「人生相談？おっさんがかい？」

「おうよ。得意中の得意でな。これまでに何人も幸せに導いてやった。いじめられっ子の中学生だとか、派遣切りにあってホームレス寸前のやつとか、いろいろな。奇跡の伝道師と呼ばれている」

透はポケットに手をつ突っ込んだまま、春本のベンチに腰を下ろした。

「やってもらいなよ」

幸太が興味津々の顔を向けた。

「やれっつての」

真琴が同調する。僕も身を乗り出した。

「ほんとにまじかよ。じゃあ、ええと何から話せばいいんだ？」

全員で春本の顔を見る。見られて、ん、と後ろを振り返った。あき

らかに口からでまかせにちがいない。しかし、まだ夜は長かった。「だから人生相談なんですよ？」

暇つぶしのつもりでパスを投げる。

「ああ、そうだな。じゃあ、生年月日と干支と星座を聞こう」

「はあ？なにそれ。おっさん、テレビに出てくる誰かの真似しようとしてない？」

やっぱりすぐにボロが出た。

「万引きを懺悔しろ」

真琴が言った。こっちも相当にしつこい。

「おう、いいな、それいこう。えー、君はいったい何を万引きしたのかな？」

春本は両手をにぎにぎしながら質問した。

「スポーツ用品が一番多いかな。それからコンビニでエロ本とか」
「うげえ、エロ本だって。やだねえ、もてないやつは」

サッカー部のヒーローの透がもてないわけはなかった。ただし、あんまり異性との交友関係で浮ついた噂は聞かない。

「それ、いま持ってるか？」

春本が一瞬、目を輝かせた。

「ねえよ」

言下に吐き捨てる。ちえっ、と春本の舌打ちが聞こえた。

「つぎいこう」

幸太が促した。

「えー、じゃあ、なんで君はそんなことするのかなあ？」

間延びした質問が繰り返される。しかし、透のほうはなぜだか少し乗ってきた。じつは誰かに聞いて欲しかったのかもしれない。

「それがわからないんだ。べつにそれがどうしても欲しいってわけじゃない。ついふらふらってポケットに入れちゃうんだよね。刹那のスリルっていうかは確かにある。でもそれだけが目的じゃない」
盗癖は小学生の頃からあったと告白した。そして誰か他人の噂をす
るみたいにな、自分のことを話し始めた。

「むかしっから俺んちは教育一家でな。成績はよくて当たり前、スポーツだって万能が当然さ。オヤジやおふくろが俺に求めてくるものがわかったから、そのとおりにしてあげた。よろこばれるからね。ま、簡単にできちゃったってわけね」

つるりと顎を撫でた。

「いやなヤツ」

真琴が、イーをした。

「塾や習い事をいわれるままこなしているうちに、俺は自分が誰なのかわからなくなってきた。何やってんだろうと思うようになった。

このままいい成績をとり続けて、一流大学の医学部に進学してオヤジの病院のあとを継ぐ。かくべつ医者になりたいわけじゃない。レールが敷かれてるから、ただなんとなくその上を歩いてるだけだ。それになんの意味があるのだろうって。わかる？その不毛な感じ」

「ほんとうに、いやなヤツ。なんのレールも敷いてもらえない者がほとんどなのに」

顔をしかめた。

「オレにも心っていうものがあって、それがまあ大きい大きなせんべいみたいなもんだとするだろ？それがいつのまにか、誰かに少しづつ嚙られて失われていくような喪失感っていうか」

わかるか？と彼はもどかしそうに繰り返した。

「なんとなく理解できるよ」

透の挙動には昔からどこか、大切な何かを鞆に入れそこねたような落ち着きのなさがあった。忘れ物を気に病んで、いつまでも校門の前でうろろする小学生みたいだった。

「そのヘンな感じが強くおこったときに、オレは欲しくもないものを万引きしてしまっ」

「エロ本とか？抑えがたい衝動ってわけね」

春本が納得した様子でひとり頷く。

「たまってるのか、おっさん。いい歳こいて」

「おめえこそ、ムラムラしてドジ踏んだんじゃねえの？」

「ちがう。バれるようなことするかよ。最初は冗談で言ってみただけなんだよね。くすねてきたジャージをくれてやった仲間に、タダのスポーツ用品店があるんだけど行くかって」

「なんかおかしな時期だった、と透は続けた。」

「その頃、オヤジの浮気でおふくろが滅入っちゃっててさ。オヤジのやつ次から次へと看護師やら、飲み屋の女だかを手当たり次第でな。金持ってるうえに、俺に似てイケメンだから始末が悪いや」

鼻の下をこする。

「離婚でもすりゃいいのに、二人とも世間体を気にして冷戦状態さ。おふくろはまったく家事を放棄して、飯も作らなくなってるね。オレは金だけ貰って、いつもミカドのハンバーガーを五コくらい食ってたんだよね。それが悪かった気もする」

複雑な顔で振り返る。

「それ以来、おふくろはブランド品買い漁ったり、着飾って出かけたりをしはじめてさ。おまけに整形狂いし始めちゃったんだよね。二重瞼に鼻のプロテーゼに皺とりに脂肪吸引だって」

「まいったよ、と溜息をついた。」

「なんのために美しくなりたいんだか、わけわかんねえ」

何かへの復讐のようだったと推測した。

「わたしはなんとなくわかる気がするなあ、お母さんの気持ち」

真琴が女らしい理解を示す。

「俺の気持ちもわかってくれよ。顔の一部を変更するって言ってな、歯止めがきかなくなっちゃってた。変更だけ。福笑いのパーツじゃないっての。おふくろの顔がしだいに変わっていくのを眺めている子の心情ってわかるか？」

想像もつかなかった。

「おまけに次は新興宗教さ。幸福の真実って最近駅前のでっかいビルが出来たの知ってるか？ローマの大聖堂みたいなもの」

「そういえばあったような気がする。」

「ああ、最近選挙に出て全部落っこちたやつ？」

「ここ数年で急速に信者の数を、全国的に急増させていた。」「そう、それ。最初は幸福の護摩炊き一回五百円かなんかで勧誘して、いい気持ちにさせるんだ。折ればみんな幸せになれるですよってな。獲物がかかったと思ったら、次は接心とかいう面接で個別洗脳してくんだよね」

心の隙間に手を伸ばす宗教というものが、僕にはどうにも信用できない。これはごく個人的な見解だが。透も同一意見のようだった。「教団の中での位を上げていくんだって、必死に奉仕してたな。他人の顔かってほど整形して、若い子が着るような派手な服で着飾ってた。別人になりすまして幸福を掴むために出かけていくわけさ」

内側に向かって折れ曲がっていく母親の心を思った。

「やめてくれるように頼んだけど無駄だった。子供のあんたには関係ないって。都合のいいときだけ子供だもんよ」

自分はまったくの無力だと寂しそうな顔をした。母親を救いたい気持ち空回りするだけだったと言う。

「気がつかないうちに、おふくろのやつ、相当な金を喜捨しちゃっててな。それでまた、オヤジと一悶着さ。オヤジにしたって、あいかわらずで、週に一度も家に帰ってきやしな。愛人のとこかなんかしらないけど。もういいかげんにしろってえの」

うんざりする心境がわかった。

「立派な家はあったって、みんな自分の好き勝手して、てんでんばらばらさ。中に住んでるのは、家族とは言えない人形の集まりみたいなもんだ。まったく、俺の幸福はどこにいったんだっての」

なかばわめいた。

「あんたはどうでもいいの。どら息子のくせに」

真琴はどら息子には手厳しい。

「俺の人生相談じゃなかったのか？」

「まあ、なんだ、おとなの男と女にはいろいろあるってこった」

春本が髭をいじる。

「それだけかよ？」

「俺の恋愛体験からするとだなあ・・・」

「聞きたくねえよ。おっさんの恋愛なんて。やたらキモいって」

「あっそ」

簡単に引き下がる。どこが人生相談かどつつこみたくなる。

「仲間内でどの店が狙いやすいとか、防犯カメラの位置を調べたりいろいろやってさあ。見張りの実行犯とおとり役で練習したりして。一年くらいの間に二十回くらいやったかなあ」

まったくゲーム感覚だったと悪びれもしない。

「獲物を後輩に売ることもあった。ママが終わったらみんな、その日の自分の出来を評価したり、次の計画を立てたりした」

楽しかった、とこともなげに言う。

「ボスはあるたなんでしょう？」

「ほら、ブラピとジョージ・クルーニーの出た映画あったろう？ええと、なんだっけ」

もどかしそうに頭を掻く。

「オーシャンズ。イレブン！」

映画好きの真琴が助け船を出す。

「そう、あんな感じでやったら面白いかなって。少なくとも俺が指揮したときには捕まったりすることはなかった。勘がいいんだよ、オレは。やばいときにはぴんとくるんだ」

「五右衛門かおまえは？」

真琴はこそ泥には容赦ない。

「MIのトム・クルーズと言え。オレがいないときに待ちきれない連中が勝手にやって、店員にみつかっちまった。警察に通報されて補導されやがった。あとは芋づる式ってわけさ。まあ、いつかはバレルかなと思ってたけど」

お手上げだというふうに肩をすくめてみせる。

「いま思えばなんで、あんな遊びに熱中してたのかわからない。みんなが熱に浮かされたような連帯感に包まれてたなあ。サッカーの全国大会の時よりずっと緊張感もあったし」

話が違うか、と笑う。

「で、これからオレはどうすりゃいいんだ？サッカー部？来年の受験？進学？どれもこれも本気でやる気にならないなあ。おっさん、さっきアフリカで暮らしてたって言ったな？オレもこのままどこか遠くに行きたい気分よ」

さあ答えは？と全員が再び春本を見る。自分の顔に集まる視線を避けるために、急に上を向いた。

「おお、雨も止んだし、きれいな星空だな。明日は晴天だあ」

白々しく、はぐらかした。

「さて、腹もくちたし、そろそろ寝るか」

おもむろに立ち上がり、煙草ごっそさんと言い残してベンチに帰る。

「あ、逃げた」

「しゃあねえな、と透はもう一本タバコを吸い始める。iポッドのイヤホンを耳に差して、うるさそうなロックを聴き始めた。レイディ・ガガかなんかの最新のヒットチャートだ。

「堕ちた偶像」

真琴が誰に言うでもなく呟いた。

寝袋にくるまった春本の盛大な鼾が聞こえはじめた。寝付きのいい男らしい。当然人生相談はそこで打ちきりとなった。僕たちは携帯ランプのオイルが切れて周囲が完全な闇に包まれるまで、最近見た映画やドラマの話をした。

夜が更けると幸太を寝袋に入れ、持参した毛布を伸ばしてその下に寝た。僕の両脇に、幸太と真琴が川の字になって横たわる。透は川縁に座ってロックを聞き続けていた。

いつのまにか夏の嵐は過ぎ去っている。ときおりかすかな水音をたてる川の上には、満天の星空が広がっていた。プラネタリウムを眺めているみたいなの河を、一条の流れ星が横切った。

無粋な月が出ていない。橋の欄干からオレンジ色の街路灯がぼんやりとした光を放っている。こもった昼間の熱気を、涼やかなそよ風が追い払ってくれた。

ふいに僕の携帯にメールが落ちた。ポンコからだった。

「楽しんでますか？」

とだけあった。

「お供が増えて、桃太郎が鬼退治に行く気分です」

と僕は即座に打ち返し、幸太の寝息を確認した。背中を向けた真琴が眠っているのかどうかわからない。

安らかに目を閉じて寝ようとしたが、甘かった。僕を迎えてくれたのは、ヤブ蚊の大群だった。毛布からほんの少し露出した手足や顔を狙ってくる。

春本からもらって飲んだスープレのせいだと思った。蚊を寄せ集めるフェロモンが出ているか、あるいは目玉の祟りかもしれない。

両脇の二人は小柄を利用して、うまく毛布にくるまり皮膚を隠している。蚊は僕だけに波状攻撃をしかけてきた。一晩中、とうとうまんじりとすることもできなかった。

3 魔法の絵筆

翌朝、太陽が顔を出すのを待ちわびて起き出した。三人揃ってペ

ットボトルの水で歯を磨き、湿らせたタオルで顔を拭く。蚊に刺された痕が真っ赤になっている。

「おはよう。よく眠れた？」

幸太の様子を見ながら聞いた。

「だいじょうぶ、今日はここでスケッチすることにしよう」

元氣そうな血色のいい顔で答えた。

春本はあいかわらず寝袋にくるまったアザラシみたいに、ごうごうとひどい鼾をたてている。透の姿は見えなかった。リヤカーから画材道具を取り出して支度をした。

川面を渡る透明の風が頬を撫でていく。みずみずしい空気を胸一杯に吸い込む。若い肺胞が大量の酸素を吸収する。心臓から脳へと排出される新鮮な血液が前頭葉を活性化させ、旺盛な創作意欲を喚起した。

幸太は一心にスケッチに取り組んだ。となりで僕も画用紙に向かう。これまでに数え切れないほど繰り返してきた行為だった。親友と二人、澄み渡った青空の下で行う写生は僥倖であった。

ごそごそと春本が起き出してきたのは、朝の気配をすっかりやり過ぎた頃だった。昨日同様、気まぐれな太陽はあたりかまわず殺人的な陽差しを振りまきはじめている。

「ほう、やってるね」

あくびしながら背後に立って、興味深そうに僕たちの手元をのぞく。

透の残していった煙草に火をつけた。

「リヤカー壊れちまったんだって？」

どうれ、と言って傾いだままの荷車を観察する。

「パンクだな。オレが直してやるよ」

スーパークラブから修理道具を取り出して作業にかかった。

「へえ、おじさん、何でもできるんだね」

感心した声で真琴が褒めた。

「おうよ。でなきや旅なんか長くはやってられねえ。ま、器用貧乏って笑うやつもいるがな」

小さいがタフなバイクで、気の向くまま日本中を放浪しているのだという。青いホンダのスーパークラブは、使い込まれたしぶい輝きを放っていた。

手際よくリヤカーのタイヤを外し、チューブを抜き取ってパンク修理を進めていく。ほとんどプロの手際だった。

長い旅の間に、何度も何度もスーパークラブのパンク修理をしてきたのだろう。小さな豆粒みたいなバイクに積んだ荷物が全財産だ。時間を気にせず季節だけを追い、気ままに生きられたらどんなにいいだろうかと思った。

「あ、ちょっとこれはまじいな」

春本が首を傾げる。

「ここのネジが折れちまってら。このままじゃダメだ。何か代わりに部品を探してこないと」

僕は拾い集めていたボルトやナットを、ジーンズのポケットから取りだして見せた。

「お、ばっちりじゃん」

その中のひとつをつまんで利用した。簡単にリヤカーは復活した。

ほぼ同時に、幸太のスケッチも仕上がった。ゆるやかに流れる川と土手の下の桜並木を描いている。その上を吹き抜ける風が、画用紙の上で渦を巻いていた。

「ああ、やっぱりダメだ」

昨日と同じようにその出来映えには、まったく納得していない。

「どうだって？」

手を拭いながら煙草をくわえた春本が、幸太の絵を覗き込んだ。

「ふうむ」

真剣な顔でまばたきもせずに見入っている。何か言いかけてはやめ、また絵を見つめた。

「なんていうかなあ・・・」

固唾を呑んで春本の言葉を待っているところへ、透の笑い声がふりかかった。

「ぎやははは、見ろよ、またこいつの絵。こんどはイタチやらタヌキやらわけわかんねえもんに宗旨変えてやがるぜ」

脇腹の隙間からうむを言わず、真琴の絵をひったくる。

「きやあ、また。返せって、このやろう」

またまた身長差のあり過ぎるボクシングが始まった。

風景画をあきらめた真琴は、旅の行程で見かけた野良の犬や猫、はぐれた動物たちをスケッチに残している。中には昨夜のハスキー犬と思われる絵もあった。

橋の下を見やると、あいかわらず毛の生えた背中が草むらの中にうずくまっている。よく観察すると、わずかに呼吸で上下するのが確認できた。

「ほらよ、昼飯買ってきたぜ」

目の前にミカドの紙袋をいくつも置いた。

「おおっと、こりやあ、すげえや」

春本が舌なめずりする。袋の中から、いったいいくつあるのかという数のハンバーガーがころがり出てきた。

「コーラもあるぜ」

「サイズのコココーラを、どんと目の前に並べる。」

「さすが、御曹司。わるいね」

口が直接胃袋につながっているかのように、がつがつと頬張る。

全員、飢えたハイエナみたいに空腹だった。次から次へと包みを破り、温かいハンバーガーにかぶりつく。滴るマヨネーズとケチャップを口角から溢れさせながら、冷えたコーラで喉の奥に流し込む。息をするのも忘れて、食うことに専念した。

真琴がハスキードのところへ、食べ物と水を運んだ。あいかわらず元気はなかったが、顔を上げて全部食べることができた。礼を言うようにまたしても、くうんと鳴いた。

「そらよ、タバコも」

春本に封の切つてない一箱を差し出した。

「なんとも気が利くねえ。こそ泥にしておくのが惜しいや」

コンビニにも寄ってきたと、透は蚊取り線香と虫除けスプレーを投げたよこした。

「なに？コンビニ？エロ本を万引きしたか？」

春本の瞳がきらりと光る。

「するわけねえだろ、と言いたいところだが、じゃあん、どうぞ、お寂しい先輩。ただし買ったんだぞ。万引きはしてない」

おとお、とひとりどよめきながら、恥ずかしげもなくエロい雑誌を押し頂いた。そそくさとベンチに戻ってページをめくりはじめる。

照りつける太陽を避けて、橋の下で寝ころんだ。満腹のおなかをさする。昨夜の不眠が、けだるい睡魔をつれてきた。旅の疲れは全員に伝染し、僕たちは夢もみない泥のような眠りに、ずぶずぶと沈み込んでいった。

目を覚ましたとき、太陽は大きく西に傾きかけていた。あたりが少しだけ騒々しいのに気付いた。橋の下から距離がだいぶ離れた河原に、大勢の人の出入りが見られる。なんだろうと眺めていた。

「これから花火大会みたいね」

真琴が指差す先には、しだいに旗やのぼりが立ちはじめている。テキ屋の屋台が、出店の準備を急ピッチで進めていた。気の早い店からは、さっそくイカを焼く香ばしいにおいが漂ってきた。

出発するタイミングを、すっかり失ってしまった。もともと行き当たりばったりの旅とはいえ、二晩連続野宿はきつい。幸太の体調も心配だった。僕はどこかで旅館を探すことを提案した。しかし、幸太はあくまでここでの野宿に固執した。

川べりに揃って腰掛け、時間を持ってあましている。これから始まる花火のために、周囲がしだいに車で埋まりつつあった。

不思議なものを見た。僕たちのいる橋の下から河原までのちょうど中間あたりまで、コンクリートの護岸工事が施されている。それに向かつて、土手の上から人形のようなものが転がり落ちてきたのだった。

それはオレンジ色の浴衣を着た五歳くらいの女の子だった。小さ

な下駄でちょこまかと走る。何を考えているのか、川に向かつて一
気に駆け下りていった。このままではコンクリートの斜面をダイブ
し、あきらかに川に飛び込む。子供らしい無鉄砲さで、前も見ずに
駆けている。

危ないと気付いて僕たちが立ち上がる前に、影が素早く動いた。
ハスキー犬だった。草むらの中から白いミサイルのように飛び出
した。川へ向かって走る幼女めがけて、全速力で疾駆する。太い後
ろ足が土を掻き上げ地面を蹴った。その姿はまさに獲物を狙う才
カミだった。

間一髪、間に合った。護岸からまさに飛び出そうとした幼女に側
面から飛びかかり、はじき飛ばしたのだ。

僕たちが走り寄った時には、じゃれるように抱きつき、幼女の顔
を舐め回していた。何が起こったのかわからずに、とうとう彼女は
泣き出した。わめきながら、もと来た道を走って逃げていった。

「あーあ、泣かしちゃった」

すぐごと僕たちは橋の下に引き上げた。ハスキー犬も尻尾を垂れ、
うなだれた様子で草むらの中に戻っていった。苦しそうに喘ぐ。無
理して全力疾走したにちがいない。

「でも、見た？この犬、あの少女を救ったんだよね」

真琴が目を見せながら言った。

「やたらなついてたから、あの子が前の飼い主にでも似てたんじゃ
ない？」

憶測でしかなかったが、そうにちがいないと思った。

「やるじゃん、こいつ」

透が小さく拍手した。

さっきの浴衣の幼女の手を引いた母親とおぼしき女が、土手の上
から現れた。茶髪で目つきの鋭い瘦せぎすの若い母親は、僕たちを
じろりと眺め回した。まったく似合っていない豹柄の派手なワンピース
を着ている。

「うちの娘が犬に襲われたそうなんだけど、あんたたちの飼い犬な
の？見てた人がいるのよ」

幼女は母親の背中に見え隠れしながら、こちらを窺っている。手に
は綿菓子を持っていた。母親がこれを買っている隙に、何を
思ったのか川に向かつて駆け出したらしい。

「どこにいるのよ、その犬は？狂犬病じゃないの？」

剣呑な視線を泳がせ、言葉を尖らせる。

草むらのハスキー犬が顔を上げて、弱々しい声で鳴いた。幼女の
姿を見ている。むくりと立ち上がって、おずおず幼女の前に歩み出
た。

「な、な、なに？」

大型犬の出現に女は驚きうろたえている。

「だいじょうぶですよ。咬んだりしませんって」

尻尾を垂れ耳を寝かせて服従の意志を、幼女に対して示していた。「あなた達の飼い犬じゃないのなら、保健所に通報するわ」

犬に敵意のないのを見て取ると、豹柄の母親は急にまた居丈高な態度を回復した。

「おぼえてらっしゃい。処分してもらうんだから」

キンキンとわめき立てる。

「あれ、こりやあ、なんだ？」

ベンチで寝ていた春本が、急に上半身を起こした。その姿を見た豹柄は、わっと声をあげた。毛むくじやらの熊かなんかだと思ったにちがいない。

「なんか、へんなもんがいる」

地面をまさぐっているかと思ったら、春本は黒い紐みたいなものを目の前にどさりと放り投げた。大きな黒蛇だった。

ぎゃっと叫んで尻餅をついた女のピンク色のパンティが全開になった。わなわなと震えている。

蛇に立ちすくんだ幼女の前には、ハスキー犬が前脚を踏ん張ってすつくと立ち塞がっている。忠実な護衛のつもりらしい。身を賭して主人を守るという堅固な意志が明白だった。

迫力のある声で吼えた。犬の剣幕に恐れをなした蛇は、おぞましい体を蠢かせながら慌てて姿をくらました。

警戒を解いた幼女は、すべてを悟ったように穏やかな顔でハスキー犬の体に触れた。自分よりも背の高い毛むくじやらの首に抱きついて、耳を揉み頭をなで回す。青と茶色、左右で虹彩の色が異なる瞳を潤ませて、犬は主人の寵愛を受けた。気持ちよさそうに尻尾を振り、されるがままになっている。

女は尻に付いた土を払う余裕もなく、慌てて幼女の手をひったてた。そそくさときびすを返す。半分パニックのままだ。

わずかな間をかくぐって、幼女は手にしていた綿菓子犬に向かって投げた。ご褒美のつもりらしかった。満面の笑みを浮かべて、後ろ手に大きく手を振った。

大騒ぎしながら土手を上っていく親子の姿を見送った。僕たちはほのぼのとした気持ちに包まれていた。再びもとの場所に戻って、ときどき咳き込むハスキー犬を眺めた。なんだかいじらしい気分になった。

苦しい体に鞭打ち、一瞬の判断で機敏な行動を起こし幼女の危機を救った。両足を踏ん張って壁となり、邪悪な蛇から主人を守った。その勇敢な姿は、失われることのない誇りに満ちていた。

自分のことをよくわかっている、という春本の言葉を思い出した。

自分が何者で何をすべきなのか、この犬はきちんとわきまえているのだ。

いちずに自らの使命を果たし、誤解で蔑まれようと気にもとめない。わずかな労いに心を潤す。それだけを糧として悔いもない。我が身に降りかかるすべての不運を許す。

心おきなく土に還ろうとする覚悟をもって、天の迎えを静かに待つ。僕たちはその精神の気高さに、深い敬意を抱いたのだった。

「あああつ」

透が背後で突然、大声を上げた。

「女の子からもらった綿菓子、犬にやらずに自分が食べちゃってるよ、このおっさん」

ベンチの陰に隠れた春本は、こっそり食べ終わった裸の割り箸を未練がましく舐めているのだった。

「しかたないじゃん、綿菓子がこの世でいちばんの好物なんだよね、オレ。知らなかった？」

しゃあしゃあど開き直った。指についた砂糖をまだ舐めている。ハスキー犬が顔を上げて、恨みがましい目を向けた。

「このクソオヤジ、恥を知れ」

「まったく」

皆でつるし上げしていると、二人の巡査が小走りにやってきた。さっきの豹柄女が寄越したにちがいない。

「あんたたち、ここでなにしてる？」

背が高くひよろ長い顔をした巡査が、じろじろと僕たちを眺め回しながら聞いた。

「風景画を描いてました」

僕はほぼ出来上がったスケッチを見せた。春本と透は不審がられないように、じわじわと数センチずつ後ずさる。

「ほう、上手じゃない」

でっぷりと突き出た腹を揺らしながら、背の低い巡査が画用紙を手にとった。二人とも三十歳代に見えた。暑苦しい制服を着て重そうな帽子を被り、額から脂汗を滴らせている。

「ん、ところでそちらの方は？」

スタートレックのスポックみたいな方の巡査が、春本に歩み寄る。「べつに、怪しい者じゃねえよ」

髭もじゃに伸び放題の髪の毛、不審者以外の何者にも見えない。巡査は手帳を出して職務質問をはじめた。氏名、年齢、住所、職業、融通の利かなさそうな口調で尋問を続ける。警察嫌いを隠そうとせず、春本は素っ気ない返事をしている。

「ハルさんは美術部の顧問です」

夏休みを利用して川の景色を写生しに来たことを、僕は力説してみ

た。

「あなたが美術部の？ほんと？」

ドランクドラゴンの塚地みたいな方の巡査が、疑り深そうに春本の顔を覗き込む。

「ちがいでねえ。俺は画家だ」

「言いすぎだと思った。」

「なんなら描いて見せようか？」

「すぐにばれるのに、と目をつむった。」

「ちよっと待ってな」

春本は青いスーパークラブの荷箱から、さまざまなものを取り出しはじめた。大小の筆、使い込んだ木のパレット、十以上もあるペットボトルを切った容器、確かに絵の道具だった。

「ほんとに画家だったの？」

幸太が目を見張る。僕は、しいつと人差し指で唇を押さえた。

「さあどうだ、これで嫌疑は晴れたかな？」

折りたたみ式の木枠を広げて、分厚い布を張る。キャンヴァスの完成だ。あつという間に絵を描く準備が出来上がった。

「さつきはあいつにいいものを見せてもらったし、ここいらでいっちゃん、俺もおっぱじめつとすっか」

小さな缶に入った原色のペンキらしき液体を容器に移すと、独特のにおいがたちこめた。ハスキー犬の背中が、ぴくりと反応した。

巡査たちは何が始まったのかと、あっけにとられて眺めている。

春本はかまわずに、キャンヴァスの上部二十センチほどを黒のペンキで塗りつぶした。幅広の刷毛を軽やかに使い、次に青、黄、赤、緑の帯を重ねていく。きれいなグラデーションが仕上がった。

「下書きがでけたので、ひとまず休憩」

乾燥させるため風に向けて立てる。タバコに火をつけ、巡査の鼻先に得意そうに煙を吐き出した。

「なに？これ」

デブの巡査が鼻をひくひくさせている。

「ティンガティンガアートってんだよ。アフリカンポップアートっていうとかっこいいかな」

創始者の名を取ったネイティブアフリカンの絵画だと聞いたことがあった。多くは野性の動物を描いたものだ。

「面白い絵の具を使うんだね」

幸太はおおいに興味を募らせている。

「普通のペンキにいろいろと石の粉を練り込んであんだよ」

得意そうに言う。

「ところで、おまえら。そろそろ仕事じゃないのか？」

巡査に向かって顎をしゃくった。河原でなにやら騒ぎが始まっている

る。マフラーを改造した数台のバイクが、爆竹の破裂するような音をたてて走り回っていた。

「俺たちはここで絵を描いてるだけだ。悪いことは何もしてねえ」のっぽの巡査が剣呑な視線を弛めない。

「美術部顧問の春本先生です」

真琴は自分のスケッチを出して隣に座った。透がベンチの下からはみ出しているエロ本を、そっと靴のかかとで押しやった。

「ふん、まあいいでしょう。今夜は花火大会だから。忙しいんだよね、僕ら。困ったちゃんたちがいっぱい出てくるもんで。面倒を起ささないように、よろしくお願いしますね」

軽く敬礼をして、でこぼこコンビは引き返していった。

「めんどくさいやつらだぜ。いちおうおまえらには礼を言っとこう。長く放浪しているうちに、いろいろな垢がたまっているな」

気の向くまま行く先々で絵を描きながら、あてのない旅を続けているのだと言う。春本の体に浮き出た年輪みたいなたくましさは、旅によって鍛えられたものなのだろう。

「いいなあ。僕もそんな旅ができればいいだろう」
うっとりとして夢みる顔で幸太が言った。

「無理に放浪しなくたってできるさ。すべてはこん中にあるのさ」
春本は指でおつむをつついて見せた。

「目を閉じれば、いまでも思い出す。アフリカの草原を渡る風や、野生の動物たちの息吹をな。いつもそれに触れられるわけじゃない。強烈な記憶はいつまでも新鮮さを失わずに、絵を描く俺の瞼の裏に蘇るんだ」

静かに瞑目した。

「感受性を高めて、強い記憶を刻めつつってこと？」
幸太は放浪の画家から何かを学ぼうとしている。

「そのとおり。いつもいっつも外に出る必要はねえ。ぼんやりと見過ごしている身近なものの中にだって、ほんとうの美が潜んでいる。耳を澄まし、目を見張れ。かつて頭の中にしっかりと留めた真実を、いつでも呼び覚ませるように鍛錬するんだ」

「でも、もう僕には時間がないんです」
幸太の体はしだいに動かなくなり、いずれ絵筆も握ることができなくなる。春本もそのことを、たぶん知っている。

「キャンバスに向かうことができなくなったら、目を閉じて想像の絵筆をとれ。頭の中の無限の夢想空間に鮮やかな花を咲かせるんだ。絵は他人に見せるためだけに描くんじゃない」

その言葉の意味が少しだけわかった。病気が進んでも、創作は続けられると言っている。芸術とは自分の内面と向き合うことで、永遠に生まれ続けると教えているのだ。

「想像の絵筆？無限の空間？」

幸太の目が輝きはじめた。

「おうよ、そのための想像力を鍛えておけてこった」

春本は乾燥した下絵を取り上げた。続きを始めるつもりだ。

「さあて、やるか」

見たことのない描き方だった。輪郭をまったく辿らない。色を重ね、塗り広げ、奔放に伸ばしていく。魔法の力が宿っているとしか思えない筆の奔りだった。

息を詰めてその動きを眺めていた。無を消していく色彩の豊かさと溢れる光の強さに驚嘆する。闇の底から意図して取り出そうとする像が、わずかずつ形をなしはじめた。単純な構成の中に、壮大な世界が広がっている。時間を忘れて絵の進行に釘付けになった。

僕たちは偶然にも、本物の芸術が生産される現場に立ち会った。それは天の配剤としか思えない貴重な体験であった。

僕はこの出会いと出来事を、街の寂れたアーケード街で小さな画廊を営む両親に伝えたくなくなった。世の中にはこんなすごい芸術家がうろついているのだ。

うちの画廊で特集を企画してみればどうだろう。画家志望を早々にあきらめて、優れた芸術を市井の人々に提供する道を選んだ父に教えてやりたかった。鬱病に苦しむ父の精神をほのかに温められるとよいのと思った。

4 シャッター街の悪夢

「おはよう。行ってきます」

囁りかけのトーストを口にくわえ、僕はカウンターテーブルの中に座る父に声をかけた。うつむいたまま、視線を交わすこともない。

昨日訪れた銀行員とのやりとりは、いつも増して熾烈だったらしい。もう半年以上もそんないざこざが続いていた。

父はしだいに元気を失い、ふさぎ込むようになった。食事もろくに摂らず、めつきりヒマになった仕事もうわの空だ。

見かねた母が診療内科にやっとのことで引きずっていく。近年多数認知されはじめた鬱病の診断が簡単に下った。貰った薬を毎食後に、手のひら一杯飲んでいいる。現代医学のもたらす薬も大きな効果をあげられなかった。

父はよく夢をみると訴えた。金縛りにあった自分を、大きな蛇が頭から呑み込むというものだった。覚醒しているのか定かではない状態で、蛇の口や食道、消化管の粘膜のざらついた感触がリアルなのだという。

息も絶え絶えになって、圧死する苦しみを味わいながら、蛇の強

烈な胃液でじわじわと消化されていく。溶けていく皮膚が火で炙られるように熱い。身悶えしながら汗まみれになって目を覚ます。そんな悪夢を繰り返しみるのだと訴えた。

どうしてこんなことになったのかと思う。別人みたいに痩せ衰え、ひとまわり以上萎んでしまった。生徒を集めて絵画教室を開いたり、有名な画家の作品を集めては展示即売会を精力的に企画していた。見る影もなかった。そんな元氣のない姿を見るのは、ほんとうに心が痛んだ。

八十年代後半、東京で暮らしていた父は実家のあるこの街の片隅で小さな画廊を開いた。脱サラして得たわずかばかりの退職金を握りしめ、生まれたばかりの僕と母を連れて帰郷した。

日本中が高度経済成長に浮かれかえった時期だった。じゃぶじゃぶに余った金で絵が買われた。そのほとんどが投機目的だった。

父の小さな画廊もずいぶんと繁盛した。仕入れる先から売れていく状況が数年続いた。

僕はそんな活況の中で成長した。山野家の最も幸せな時期が長く続いた。なんの不安もなかった。この繁栄が青天井で続くと誰もが信じていた。銀行の甘い囁きに乘るなどいうには、世過ぎのためにしたたかさが足りなかった。家賃を払うより、借金して値上がりし続けるはずの不動産を買わねば損と誰もが思っていた。

当時、県庁所在地のこの地方都市の文化経済の中心は、この南町商店街であった。父は銀行の融資担当者から薦められるまま、ここに二十坪ほどの土地を買い四階建てのビルを建てた。アーケードに面した一階を画廊にし、上階に移り住んだ。

祖父の残した家屋敷を抵当に入れ、銀行からの多額の借金で資金を捻出した。神話に守られて土地やビルはどこまでも値上がりし、絵はあいかわらず売れ続けていた。

バブルが弾けたのは一瞬であった。その後には奈落が待っていた。かつては金を借りてくれと、甘言とともに日参した銀行員の態度は豹変する。月々の借金返済を一度も滞らせたわけではない。それなのに不動産の評価額低下による担保割れとやらを理由に一括返済を迫る。いわゆる貸し剥がしというやつだ。

融資担当者も損を被らないために、なりふり構っていられなかったのだらう。ババを最後に誰に押しつけるかという単純な理屈だった。

アーケード街には閑古鳥が鳴き、借金を持つ多くの店が閉店をやむなくされた。シャッターが下りたままの店舗が、ここ一年ほどで急増した。郊外型の大型量販店ができたことも原因だらう。南町商店街の凋落は、行政のどんな活性化対策も無駄なほど深刻だった。ある日の朝、うっとりという曇り空を見上げながら、いつものよう

に自転車走らせた。僕が通う聖徳高校までは約二十分ほどの道のりだ。おかしな胸騒ぎのする一日の始まりだった。

放課後を待たずして案の定、体調が異変をきたした。軽い目眩から始まって強い頭痛が訪れた。吐き気に襲われて昼食をすべて戻した後、僕は担任教師の内田晴美に申し出て早退することにした。

ふらつきながら自転車で自宅に帰ると、カウンターの中にうずくまるはずの父の姿が見えなかった。何かを直感した。朝感じた不安が現実の黒い霧となって、胸の内側に広がりはじめた。

二階にいるはずの母親に声をかけた。返事がない。鞆を放り出し、自分の悪さを押さえて店の外へ出た。両親の姿を探し、アーケード街を小走りする。

櫛の歯が欠けたみたいだなシャッター街をうろつくほどに、不吉な予感が強くなった。虫が知らせるといふやつだ。

「あら、真一。早いね」
ころころと太った僕の母が、細々と営業を続ける梅本生花店の軒先から声をかけてきた。長い間、幸太の母親が勤めていた店だ。看病の必要性がなかったとしても、激減した客足のせいで今頃職を失っていたことだろう。

母は画廊に飾る花を買っている。売り上げが落ち込んだ今でも、生花を店の玄関に置くことをやめていなかった。スーパーの買い物袋を提げていた。

「お父さんの姿が見えないんだ。家中探したけど、どこにもいない」
息が切れていた。

「店番を放り出してどこかに行くとは考えられないだろ？」
母の顔色が変わった。

「あ、そういえば、切り花してたとき店先で挨拶したわよ。なんか顔色が悪かったなあ」

おっとりした梅本生花店の奥さんが、小首を傾げる仕草で思い出した。昔はさぞかし美人だったろうと思わせる上品な老女だった。一時間ほど前のことだという。

「あたしが買い物に出たあとのことね。なんだかおかしい」
母は事態をのみ込んだ。

「一緒に捜そう、真一。急がなきゃ」
言うより前に、バレーボールが転がるように走り出す。

「うちの父を見ませんでしたか？」
顔見知りの店主に片っ端から聞いてまわる。

店番がてら、ひとり将棋を指していた呉服屋のじいさんが反応した。ちよっと前にロープウェイ乗り場のほうへ歩いていく父の姿を見かけていた。どこへ行くのかと不思議に思ったという。

「白眉山にのぼったのよ、きつと」

南町商店街の長いアーケード街を過ぎてしばらく行くと、白眉山の麓に突き当たる。そこには山頂へと向かう市営のロープウェイ乗り場がある。すっかり寂れていたが、赤字を出しながらいまだに営業していた。

ヒマそうに欠伸を噛み殺している改札係に尋ねると、確かに老人が一人でのぼっていったという。

「老人じゃありません。まだ中年です」

母が反発した。まだ五十歳にもならないのだ。鬱病はそれほど父を老け込ませた。

改札係はしらけた顔で、そりやどうもと答えた。もどかしく券売機にコインを放り込み、乗車券を投げ捨てるようにしてゴンドラに乗った。

「お父さん、だいじょうぶかしら？朝はいつもと、あんまり変わらなかつたけど」

母は破れてスポンジのはみ出たシートに座って落ち着かず、しきりに貧乏揺すりをしている。

「あら、桜の木がたくさん枯れている」

不安を紛らわせようと、山肌近くをゆっくりと上るゴンドラから眼下を眺めていた。かつて花見に来た場所を懐かしむ。季節外れの桜林は手入れが行き届かず荒れていた。

「なんだか虫が知らせて早退してきたんだよ」

やたらと遅いロープウェイに齒がみした。たるんだザイルがギシギシといやな音をたてる。

「縁起でもないことを言わないでよ」

膝の上でぎゅつと拳を握りしめた。

ドアが開くのを待ちかねて、山頂の広場へ飛び出す。入れ替わりの客が驚いた顔で身をかわした。

はたして、そこにはしおれた父の姿があった。市内を一望する見晴らしのよい展望台のベンチに、一人で腰掛けている。

誰もいない広場は、コンクリート造りの胸ほどの高さの柵で囲まれている。その向こう側は、ときどき自殺者が利用する断崖絶壁になっっている。これを心配していたのだ。

「お父さん、いったいここで何しているの？」

胸を撫で下ろしつつ駆け寄った。

「ん？ああ、おまえたちも来たのか？」

寝惚けた顔で言う。

「一人で出かけないでよ。心配したんだから」

母が目を潤ませながら父の肩を掴む。

「もうだいじょうぶだ。わるかつた」

力無く顔を上げてわかつたというふうに頷いた。

「さつきから、猫に乗られて困っている」
口をきくのはひさしぶりだった。

「猫？」
父の膝の上に何かがどっかりと乗っかっている。巨大な黒猫にやつと気付いた。

「私がここでよからぬ事を考えていたら、こいつがのそのそとやってきて膝の上に乗ったんだ。なんだか知らないけど、いっこうに動こうとしない」

皆が目を落とす。

「重いんだ。ゆうに十キロはあるな、こりゃ」

黒の鉢割れ柄の大きな猫が、すやすやと気持ちよさそうに、父の膝の上で寝ていた。

「漬け物石みたいに私を押さえつけて、その柵の向こう側へ跳ぼうなんていう気を奪ってしまったよ」
へらへらと笑う。

「なんてこというの。あなたは、あなたは」

母があたり憚らずに泣き出した。父に抱きついて前後に揺する。

「しかたなかったんだよ。今日ほど鬱の大波が来たことはない。朝方また例の蛇に吞まれる夢をみて以来、ずっとおかしかった。真っ黒い闇が一気に覆い被さってきて、苦しくて苦しくてもうとうてい生きていられないと思った。気付いたら、ここに來ていたんだ。もうちよつとで、そこから飛び下りるところだった」

憑き物が落ちた顔で、淡々と喋る

「思いとどまれてほんとうによかった。おまえたちにとんでもない仕打ちをするところだった。まったくこいつのおかげだよ」

目を覚ました黒猫は、喉の奥が覗けるくらいの大あくびをした。鼻の先まで黒い。四つの足には白いソックスを履いている。

「野良猫みたいだけど、最近までどこかで飼われてたんだね。金玉抜かれちゃってるもん。飼い主の都合か何かで、捨てられちゃったんじゃないかな」

父が言うように確かに黒猫の尻尾の下には、中身を奪われ萎んだ袋がぶら下がっていた。

「でも、強くたくましく生きているみたいだね。捨てられようが蔑まれようが、悠々としている」

くあああ、と黒猫はもう一度大あくびと伸びをして、父の膝の上からどずんと地面に下りた。ほんとに地響きがした。

「こいつの超然とした姿を見ていたら、もう一度がんばれそうな気がしてきたよ」

力はないが、笑いを浮かべて言った。

「ほんとうに、だいじょうぶなのね？」

まだ泣きながら、母は抱きしめる腕に力を込めた。

「そうだよ、父さん、店なんかなくなっちゃってもいいよ。僕だっ
てもうすぐ卒業だし、どんな仕事だってできる」

僕も涙をこらえながら言った。

「だめだ。おまえは大学に行くんだ。それくらいのことさせてやれ
ない親だと思つたら、もう一度死にたくなる」

美術の道に進みたかった。自分にその才能があるかどうか自信はな
かったが、大きな夢は抱くのは一人前だった。

「東京の大学に行きたいと言っていたらう？初志貫徹するんだ。お
まえは夢を追え。私みたいにならずに、やるべきことをやれ」

父の言葉にかけがえのない家族の温かさを感じた。

「ありがとう」

こつくりと頷いた。

「でも、今からしつかり受験勉強して、できたら金のかからない公
立にしてくれ。奨学金もたつぷりもらって、バイトもするんだぞ」
あははは、と腹を押さえる。

「いやああ、と甘えた声をあげて黒猫が広場を横切っていた。い
つの間にか御供を二匹連れている。若いオスのシマ柄とメスの三毛
は、黒猫を敬うように両脇からおいを嗅ぎ、尻尾を垂れて寄り添
っていた。

我がもの顔でのしと歩いていく。柵の向こう側の草むらから、
突然子猫が三匹走り出てきた。メスの三毛の産んだ子であるのは明
白だった。

「あれ？あいつ去勢されてるのじゃなかったっけ？」

群れの最後をちよろちよろと駆け回る子猫は、ボス猫と同じく黒の
鉢割れ柄だった。鼻まで黒く、白いソックスまでそっくりだった。

「ほんと、不思議ね」

三人は日の落ちかけた人気のない広場で、顔を見合わせて笑った。

一列に行進する野良猫の群れは、何を慌てるでもなく山肌の桜の
木の合間に消えていった。

5 夜空に咲く花

春本の筆はときに素早く多彩な色を散らした。あるいは重ねたペ
ンキが絵の上で微妙に絡み合うのを、ゆったりと待つ。

混沌の泥の中から立ち上がる古代の彫像のように、少しずつ何か
の姿が浮かび上がる。僕たちは飽きもせず、春本の背中越しに絵の
進みを眺めている。

「よし、もうちよい、これでいい。最後の仕上げは今はやらない」
陽が落ちて薄暗くなりかけている。河原では花火大会を待つ人がど

やどやと蠢く気配がしていた。

「どうしたらこうなるのかわからない。とても真似できない」

幸太が感極まった様子で春本と話し始めた。色の置き方、光の表現方法、構図を決める作法などについて矢継ぎ早に質問をはじめた。

「昼間に幸太の描いたスケッチを前にして、春本は創作の奥義について話し始めた。」

「やっぱ最初の一瞬だね。肝心要は色だよ。じっくり見てるとかえってわからなくなるがな」

春本は両手で造ったファインダーを覗き込んで言った。

「一瞬で絶妙微妙な色を直感するんだ。それが決まったら自然に形がついてくる。色とは光だ」

「光が実像を削り出す？」

幸太には話の意味がわかるのだ。

「そう、だから輪郭はいららないんだ。光の伸展を邪魔しないようにな」

「まず、色に敏感になれと？」

「ああ、だから蚊の目玉を飲ませた」

横で聞いている者たちは、うつぶととなった。

「色を見分ける能力は、すべての人間に本能的に備わっているものなんだよ。その感度をとことん鍛え上げる必要がある」

「センスや才能だけじゃない？」

「もちろんそれもあるよ。だけど、もともとヒトの色覚は他の動物の何万倍もある。犬の嗅覚が優れているのと同じだ。ヒトは視覚で物事を判断するわけだね。その豊かな感覚は、鍛錬によってさらに何倍も感受性を増すことができる」

春本の話はしだいに熱を帯び始める。浮浪者がいつのまにか科学者に変身していた。

「色には、色味の種類である色相、明るさの度合いを示す明度、そして鮮やかさの強さを表す彩度がある。鍛錬によって、この三つを筆の先だけで自在に操れるようにするんだ」

海の水を吸う海綿のように、幸太はその教えを吸収していく。

「残念ながら、僕と真琴はしだいについて行けなくなった。聞いているのが辛くなってきた。」

「色の道は難しいってか？」

透も背伸びとあくびをして、若い女の嬌声が混ざる河原の喧噪に興味を示した。

「俺、あっちの方面、ちよっくらのぞいてくるわ」

イヤフォンをいじりながら、ぶらぶらと歩いていく。

やがて盛大な花火大会が始まった。

「わたしたちは花火でも見物しましょうよ」

真琴が先に立って歩く。コンクリートの防波堤から、二人並んで足を投げ出した。

見事な大輪の花が、夏の夜空に咲くのを見た。黒い川の上に燦然と輝く無数の星たちをバックに、原色の大玉が次々に弾ける。スダレのように広がり、一瞬で暗い大気の中に吸い込まれてしまう。網膜に残る光の軌跡の上に、間髪入れずに新しい火の玉が発射され続けた。

「きれい。この景色、たぶん一生忘れない」

花火に照らされた横顔を見る。なぜかどぎまぎしてしまふ。

「ねえ、真一君は進路どうするの？」

夏休みが終われば、来春の進路模索が最終始動する。

進学校である我が校では、とくにその活動をはじめている生徒が多かった。文化系の学生だけは、比較的のほほんとしている。

「どっかの大学に進学するつもりだよ。そこで一生の仕事といえるものを探すつもりだ」

どこで何をしようか、まだ一切決まっていない。

「うん、私も大学に行きたい」

東京の美大への入学を希望していたはずだ。

「でも、ちよつと無理みたい」

寂しそうに花火を見上げる。小さな声が夜空を覆う爆発音にかき消された。

「ママを放っては行けない」

真琴の母親の自堕落な下着姿を思い出す。

「自立できるようにになったら早く逃げ出したいって、そればかり願ってきたけど」

母娘だけで生き抜く困難がどんなものなのか、想像すらつかない。

「私、親から虐待されてたんだ」

前を向いたまま膝を抱いた。

「小学生くらいまでは、ほんとに悲惨だったな。なんの抵抗もできなかったし」

虐待という単語が出口を探して僕の頭の中を転がる。

「父親のギャングブル狂いが原因で、両親が離婚したの。ママに引き取られることになった。私にとっては地獄の始まりだったよ」

精神的な苦痛の歴史が語られはじめた。

「五歳のときだったかな。二人で暮らすようになってしばらくしてから、まず無視が始まった。いくら呼びかけても私の姿が透明になつたみたい、ママには見えてないの」

とっさには状況を思い浮かべることができない。

「それが怖くて、わざとらしくママの目の前を転げ回ったり、泣き喚いたりしてもダメ。徹底的に見えないふりをするのね」

真琴の話を見綿でくるんでやりたかった。それくらいしかできそうになかった。

「食事が与えられないこともしょっちゅうだった。一日に一食だけ、カップラーメンなんて日も多かったなあ。いわゆるネグレクトってやつ」

けろりとした様子で言う。

「私が泣いていると、ときどきキレて殴られた。なんでママだけがこんなしんどい目をしなくちゃならないのって。向こうも泣きながら狂ったように私を平手でぶつよ」

子供を打つ母親の心の空虚さを思った。

「だから私の右の耳はほとんど聞こえないの。叩かれたときにパンって音がして鼓膜が破れちゃったのね」

こつち、と形のいい小さな耳を髪の毛から出してみせる。

「さすがに中学生頃からは、子供扱いできなくなったせいに対応が変わったけど」

不良少女やってたこともあるんだぞ、とおどけてみせる。

「中学時代は繁華街を渡り歩いて、ほとんど家に帰ってなかったなあ。家に帰りたくない子供が他にもいっぱいいて、なんとなく寄り集まって夜を過ごしてた。べつに悪いこともしてないのに、警察に補導されては親を呼ばれての繰り返し。連れ戻されたその晩にまた抜け出したりして」

髪を赤く染め、派手な化粧をした。

「いつもイライラしてた。自暴自棄になって、リストカットの真似をしたこともある。痛かったから、すぐにやめたけどね」

ほらと左の手首を見せた。複数の生々しい傷跡が引き攣れになっている。真似した程度の深さの傷ではないことがわかる。

「みんなてきとうにバカやってるように見えて、ほんとうはぎりぎりだった。橋の欄干の上を千鳥足で歩いているような感じ。仲間の中にはクスリに走る子もいた。こんな話、退屈？」

ブンブンと僕は首を振った。退屈どころか、やんわりと抱きしめたかった。

「ある晩、クスリの売場でヤクザ者とトラブルになって、狩られる事態になったの。捕まってひどい目にあわされた子もいた。バラバラになって夜の街を逃げ回ってたら、似顔絵描きのおじさんが匿ってくれたの」

昔から凶画の時間が好きだったとつけくわえる。

「一晩中、おじさんが酔った誰かの似顔絵を描くのを見ていたんだ。そしたら、私もなんだか絵を描いてみたくなったの。道具をちよつと借りてやってみたら、そのおじさんが、けっこう上手だよって。人に褒められるなんてはじめてのことだった」

透がいなくてよかった。

「あ、そういえばそのおじさん、ちょっと春本さんに似てたな。髭は生えてなかったけど」

真琴は春本のが気に入ったみたいだ。

「それで中学校に戻って、美術部に入ったんだよ。タダでいろんな道具や材料が使えたからね。絵を描くだけじゃなくて粘土をこねたりもしてみたの。こんな面白いことがあるのに、もっと早く気づけばよかったって」

あつという間に中学は卒業で、高校でも必ず美術部に入部するつもりだった。この街にやってきたのはその頃だという。

「お店を始めてから、ママは急に私に依存するようになったの。なんやかやと口実をつけて、店を手伝わそうとするし」

ときどき鳴る携帯に物陰で対応していた。

「客商売があんたには向いてるなんて、わけわかんないこと言って。ほんと、バツカみたい」

シャッター街の店主たちのしけた財布をあてにする場末のスナックが仕事場だ。

「家を出るつもりなのを知っていて、見捨てるつもりかと酔って愚痴るの。育ててもらった恩を仇で返すのかって。今さらなにをってかんじ」

いまだに母娘二人きりで暮らしていた。美術に明け暮れる真面目な高校生活を、彼女は送っている。

「ママは歳をとって一人になるのを心底怖れている。ひとりぼっちになるのに耐えられないの。ほんとに調子いいよね。あんたは今ままで、子供に何をしてきたのって言いたい」

あいかわらず鮮やかな花火が夜空いっぱい広がっている。

「粘着質にまとわりつくのは、無視の裏返しなんだよ。きつと、私はママの分身なんだな。子供を虐待するのは、どうにもならない自分への怒りや諦めなんだと思う。自分を痛めつけ傷つけているの」

苛立つひ弱な魂の矛先が、もつと弱い自らの分身へと向かう。

「なんだかんだ言いながら、二人で生き延びてきたんだよね。女手ひとつで子供を育てるってことが、どんなに大変なことだかも見えてきたよ。だから、一方的に足蹴にするようなこともしたくないんだ」

気持ちの優しさは真琴が持って生まれたまま、いまだに失っていない美徳のひとつだ。

「でも、親子二人でどろどろに溶けながら、ゴミためみたいなのころで腐っていくなんていやだよ」

怖気を震うようにイヤイヤをした。

「離れなきゃいけないってわかるんだ。このままじゃ私までダメになっちゃうって」

焦りが伝わってくる。

「でも、あんな親でもやっぱ、たった一人の親なんだよなあ」
いかに虐げられても、親を慕う五歳の幼児の心は変わらない。真琴が母親を想う気持ちに嘘はない。

「ねえ、真一君は東京の大学が第一志望だったよね。私も東京の美大に行きたい。そこでほんとうの芸術を学びたい。私なんかにできるかどうかわからないけど」

「心配しないでいい。きみには優れた資質がある。まず基本をしつかりと学ぶべきだと思う」

三次元の空間を不思議なねじれの連続と捉える。不思議な感覚を真琴は持っていた。特異な才能といえるかもしれない。顧問の内田晴美もそれを認めていた。

「でへへへ、また褒められた。これで二回目」
褒められて成長するタイプなんだ私、と笑う。

「僕も似顔絵は得意だよ。ヤクザから守ることはできそうにないけど」

もうバカはやらないからだいじょうぶ、と親指を立てた。

「私と一緒に東京に行かない？真一君と一緒になら私、がんばれそうな気がする」

へへへと照れ臭そうに笑ってみせる。

「行くよ」

即座に僕は言った。たった今そうすることに決めたのだ。

「一緒に夢を実現しよう」

真琴と過ごす東京での学生生活を想像してみる。ときめいた。

真琴のことが好きだった。美術部ではじめて出会ったあの日あの時から、僕は自分の気持ちにはつきりと気付いていた。

彼女が僕を見る光の中にも同じ波長を感じていながら、どう告げたらいいのかわからなかった。なんの手練手管も持たない、ただ鈍感なだけの意気地なしだった。

「ほんとう。約束ね」

小指を絡めて指切りをした。わずかに触れ合った指の感触が、少しだけ僕を大胆にした。

肩を抱き寄せ、唇を重ねた。脳をとろけさせる柔らかさだった。頭の中で、その夜いちばん大きな花火がドカーンと破裂した。

僕たちの目の前には、流れの速い大きな川が流れている。夜空に咲く花を見飽きたら、木の葉の船を浮かべて漕ぎ出さねばならない。

それができるかどうか、まだ口だけの決意に過ぎなかった。あるいは、すぐに粉々になって沈没するかもしれない。

しかし、それを怖れては何も始まらない。自分が何者なのか、

何を成すために生まれてきたのか、答えはどこにも落ちてはいない。もがきながら手探りを続けるだけだ。

だから、今夜だけは真琴の鼓動を感じながら甘美な眠りを貪りたい。寄りかかると肩の重みが増していく。安らかな寝息をたてはじめた。むにやむにやと、かわい寝言を聞いた。僕は身じろぎもできずに、ただ移りくる血潮の熱さを感じている。

最後の花火が川面に散り、無数の車がクラクションを響かせながら夜の帳に消えていった。河原はしだいに静けさを取り戻していく。僕は真琴の体を抱いたまま、いつまでも遠い星空を眺め続けていた。

6 旅の終焉

日の出とともに春本が動き出す気配がした。絵の前に座る。最後の仕上げをするつもりらしい。

「あれ、おっさん、早起きじゃない」

透の声があった。あくびを噛み殺す。どこで何をしていたのか、なんだか間抜けな顔をしている。

「よお、不良少年。朝帰りかい？」

車椅子で毛布を被っていた幸太も、そろそろと起き出す。真琴は公園の水飲み場に身繕いに出かけた。

「花を散らすことにした」

春本は再び筆をとった。ペンキのにおいが眠気を追い払う。

一気呵成に描き上げた。ぼんやりとしたまま姿を確定されていなかった像が、命を吹き込まれる。精気を含んだ色の滴りを、筆の先から自在に散らしていく。

「できた。これでいい」

腕を突き上げて、ガッツポーズをする。

「ティンガティンガアートの完成です」

全員が歓声を上げた。

ハスキー犬が太い前脚で大地を踏み、すっくと立つ姿がそこにあった。広大な自然を連想させる七色のグラデーションが、その背後を飾る。黒で潰した大空には、派手な火炎の花が咲き乱れていた。

「すごい」
背後で真琴が大声を上げた。タオルで顔を拭く手を止めて、言葉を失っている。

ぴんと起きた三角の耳、敵を見据える険しい瞳、たくましい肩や引き締まった胴体は、生命の強さに満ちあふれている。皆を引きつけて放さないのは、その魂の気高さだった。

どんな困難な状況に陥っても、けして腐ったり焦ったりしない。微塵の迷いもない不屈の意志がそこに鎮座していた。

「なぜこんなものができるの？」

幸太がゆらゆらと近付きながら言った。

「僕には描けない。才能がないから？だから命を持った絵を描くことができないの？」

真っ赤な顔をしている。

「学びたい。でも時間がない」

うわごとのように言った。それはやがて叫びに変わった。

「生きたい。ぼくはもっと生きたい」

親友の言葉が鋭い石の矢となって、僕の胸を深々と射抜いた。

真摯な努力を怠らずに芸術の道突き進もうとする彼を待っていたものは、あまりにも苛酷な病だった。すべての夢や希望は根こそぎ奪い去られた。それでも折れずに残された時間で、何かを産み出そうと闘っている。

それに比べて、僕たちは今を十分に生きていると言えるだろうか。

あまりにも漫然と、時を浪費する日々をおくってはいないか。

誰も声をかけることができなかった。春本ですら髭をいじって何かを考え込んでいる。

突然、草むらの中でハスキー犬の背中が動いた。艶を失って汚れた毛が盛り上がる。前脚を踏ん張って吼えた。オオカミの遠吠えのように首を伸ばし、空に向かって雄叫びをあげる。

絵の中から抜け出たかと振り返った。鏡に映ったみたいに、凜々しいハスキー犬の姿がそこにある。まるで僕たちに何かを伝えるために、最後の力を振り絞っているとしたか思えなかった。

「まだ生きている。そう言ってるんだ」

春本が言った。

「自分はまだ生きてここにいます」

幸太はふうと溜息をついて車椅子に沈み込んだ。同時にハスキー犬も膝を折る。通じ合うために大きなエネルギーが消費されたのだ。

生き物が種や言葉を越えて、大切な何かを共有し分かち合う。そんな奇跡に近い出来事が、目の前で起こるのを見たのだ。茹で蛸のような顔でぐったりした幸太が、自ら呼び寄せた天啓だった。

「たいへん、ひどい高熱だわ」

幸太の額に手を当てた真琴がうろたえた。

しまった、と思った。雨に打たれたり、無理な野宿を二晩も続けたのだ。幸太の体調にもっと気を配るべきだった。

「病院に運ぼう」

透がりヤカーを押してきた。

「これを飲め」

春本がスーパークラブからなにやら取り出した。黒い丸薬だった。幸太の手のひらに乗せる。

「日下、やめとけ」
透が目を手を伸ばしかけたが、遅かった。幸太はなんの疑いも見せず、ごくんと素直に飲み下した。
「なによ、それ？」
恐る恐る聞く。
「アフリカンオオコウモリのフンだ」
すまして答える。
「やっぱり。フンで、うんちのことかよ。こうもりだった？」
「おうよ。熱をさますにやこれが一番だ」
うなだれた幸太の耳には入っていないかった。
「僕たちはもう行きます」
荷物をまとめながら春本に礼を言った。彼によってタイヤはきちんと修理されていた。
「うん、これでお別れだ。気をつけていきな。俺はもう少しここにいて、あいつを看取ることにするよ。そう長くはない。桜の木の下にでも埋めてやるつもりだ」
ハスキー犬を見やる。河原に並ぶ桜の木のどれかが墓標になるのだろう。
「この絵はおまえたちにやる」
出来上がったばかりの絵をぼいとよこした。
「ほんとにいいの？ありがとう。お会いできて光栄でした」
真琴が絵を大事そうに受け取った。
「ふん、エロ本と交換だな。ついでにタバコも置いてやるよ。俺はもう吸わない」
透の投げたタバコとライターを、春本が素早くキャッチした。
「あはっ、ついでに万引きもやめるこった」
ぐったりした幸太を、車椅子のままリヤカーに乗せた。
「じゃあな、アディオス」
しゅたつと春本は右手をあげた。さっそくタバコに火をつけ、ベンチの下のエロ本を取り出している。
僕たちは橋の下を後にした。幸太を診てもらえる病院を探さねばならない。
透が取っ手を引き、僕と真琴が両脇から押した。街に戻るには、土手を外れて長い坂道を延々とぼらねばならなかった。
リヤカーは重力に絡め取られているかのように重かった。すぐに汗が噴き出し、息が上がる。
うんうん唸りながら坂を這い上がる僕たちの頭上で、酷薄な太陽がぎらぎらと笑っている。足元を見つめてアスファルトを踏みつけた。溶けたコールタールがスニーカーの裏側にべたつく。

一瞬の油断が生じた。背の高い透が両手を伸ばすと自然取っ手が持ち上がった。僕たちは身を低くして地面を向いていた。車椅子のロックが迂闊にもかかかっていなかった。

リヤカーから滑り落ちた車椅子は、幸太を乗せて坂道をするすると下りはじめた。長い下り坂を後ろ向きに転がっていく。

凍りついた。慌てて追いかける。透と真琴は、足を絡ませて転倒した。

「幸太！」

僕が叫ぶと力無く顔を上げた。事態を飲み込めない顔で周囲を見回す。筋力を失った両手は、勢いよく回る車輪を止めることができない。

坂の向こう側から白い大きなトラックがやってくる。若い茶髪の運転手は携帯電話に夢中だった。まさか車椅子が坂を転がり落ちてくるとは思っていない。

ゆっくりと衝突の瞬間が近づく。幸太は振り返って迫り来るトラックの姿を認めた。

僕は走る。親友をつかまえようと焦る。だらりと垂れ下がった彼の両腕を掴むために、うんと手を伸ばす。とどかない。

親友の顔を見た。死への恐怖に歪んでいるのか？そうではなかった。その表情は穏やかに凧いでいる。自分の命を力の限り燃やし続け、来たるべき時を静かに待つ。選ばれた者だけに許される安らぎが、そこにはあった。

僕に向かって、彼もゆっくりと手をさしのべた。母親が走り寄る幼児を迎えるような仕草だった。薄く、微笑んだ。口の縁を両側で持ち上げ、にんまりと笑ったのだ。その微笑みが何を意味するのかわからなかった。

7 ピンク色の驟雨

ポンコこと内田晴美の発案により美術部の部室で、僕たちの卒業展が開かれることになった。夏休みの経験から半年以上がたつ。その間、受験勉強をこなしながら、少しのヒマをも惜しんで創作に努めてきた。

卒業式まであと一週間ほどを残し、つくり上げた高校最後の作品を並べるのに熱中している。

「よくできてるわ」

ひとつひとつの作品を吟味しながら、ポンコはうれしそうに目を細めた。あいかわらず過剰なアイラインのせいで、渋面のパンダのように見える。

「これもここに置けばいい」

旅をともしたりヤカーを部屋の中心に展示しようというのだ。美術行脚と派手なデザインで描かれている。その周囲に麦わら帽子、折りたたみ椅子や絵の道具などをレイアウトしてみる。展示会の成り立ちを示すのには、うってつけの飾りに変身した。

布を張った部屋の壁には、道中で描いたスケッチやこれまでに書きためた絵画を展示する。そして最後に一点だけ、僕たちが描いたのではない作品を参考出品することにした。もちろんそれは、春本からもらったあの絵だった。

「幸太君の絵はすごく変わったね」

額を吊るのを手伝いながらポンコが褒めた。

「いろいろなやり方を試しているんです。これからもっと変わると思います」

車椅子に座ってみんなの作業を眺めていた幸太が、自信ありげに頷いた。

トラックの下に吸い込まれた車椅子は針金細工のように潰れたが、幸太は奇跡的に軽い打撲だけですんだ。救急車で運ばれていく彼は、ぶつかる直前に浮かべていた微笑のままだった。

難病の上に無理がたたって夏休みの間中、中央病院に入院を続けた。僕は幸太の母親に繰り返し謝った。彼女は雀斑に皺を寄せる例の笑いで僕を許してくれた。おかげでこの子は大きく変わった、すごく強くなったと礼を言った。

退院の日に、なぜ笑っていたのかと、僕は幸太に聞いてみた。危機的状況下にあって微笑むことができる理由が知りたかった。

「何も怖くないことに気付いたんだ。僕たちは生きていくかぎり未完成なままだということに。だから、進化を続けることができる」

親友は穏やかな口調で言った。
「時間が尽きるときを案じても仕方がない。まだ何かを成していないと焦ることが、どんなに愚かなことであるかわかったんだよ」

彼は自分に訪れた考えを語りはじめた。

「僕たちはまだ何者でもない。たぶんその未熟さを呪う気持ちは生涯消えない。だから、今を闘う意義がある。これでいいのか？こんな自分を許せるのか？問い続けることが僕たちに残された唯一の道なんだ」

しっかりとした口調で続ける。

「その険しい道を辿る過程で力尽きようと、それがいったいなんだというんだ。もともと失うものは何もない。そう思ったら怖さが消えて、いつのまにか笑ってたんだよ。橋の下でハスキー犬が教えてくれた」

微笑みの意味がすくと僕の胸に落ちてきた。

事故から復帰した幸太は、得意の風景画を数枚描いた。作風があ

きらかに変わっていた。たとえば静的な風景でありながら、野に咲く可憐な花の上を吹き抜ける夏の風が躍動している。夜の河原や土手の景色を彩るのは派手な花火だった。

最も大きな変化を遂げたのは色遣いだった。多彩になり、熱を帯びる画面からは強い電磁波が可視光となって放出される。世界がいきいきと輝いている様が、梓をはみ出す勢いで表現されている。

「蚊の目玉の効果さ」

分厚い眼鏡の奥で黒目をギョロつかせる。

画面の片隅には必ず、豆粒みたいな人や犬の姿がつけ加えられていた。橋の下で出会った者たちすべてをモチーフにしている。

しかし最近ではさらに筋肉の無力化が進んで、絵筆を握るのが辛くなってきた。ポンコの勧めでパソコンを導入することにした。コンピュータグラフィックを利用して絵を描くのだ。マウスが使えなくなれば、動く筋肉を探して機材を改良する。そのセットアップは僕の仕事だ。

この苛酷な病について勉強し準備をするつもりだ。やがて、人工呼吸器の装着に伴い、会話ができなくなるだろう。眼球運動を介助者が読み取り、文字盤を利用するなどしてコミュニケーションを図るしかない。本人の意志による筋の収縮、あるいは脳波などが検知できる場合は、重度障害者用意思伝達装置の使用が検討されるとい

う。本来優れた画家になるべき親友の闘いを、僕は最後まで見届けた。それがまた僕の修練の手段でもある。

今のところ幸太は新しい技法を駆使して、スピードは落ちたがさらに作品のレベルを上げていた。彼の言う「進化」というやつを続けている。最後には、春本の伝えた「想像の絵筆」を奮うことにな

るのかもしれない。残されたしばらくの猶予の間に、できるだけ多くの現実の作品を残させてやりたかった。

「これも面白いよね。三崎さん、自分の進むべき方向性がみつかったみたいね」

テーブルの上に飾られた真琴の作品を、ポンコはあらゆる角度から吟味している。

真琴は紙粘土を使った小さな人形を無数に生み出した。旅の途中で見かけた野良犬や猫、浴衣姿の少女、もちろんハスキー犬だっている。なんともいえないユーモラスな姿にデフォルメされていた。丸い輪郭で造型され、あちこちを向いている。細やかな彩色がリアルに施され、どれもが幸せそうにころころと生きていた。

それらを頭上の花火を映し込むように描き込んだ大きな鏡の上に並べる。不思議な世界が創出された。お伽の国の住人たちが夜空の花火を楽しみながら、平和に遊んでいる。見る人の心を自然と和ま

せ、ほんのりと温める、そんな力を有していた。

「つくっていてほんとうに楽しかった。だからこんなにくさなってきたの。指をこねて小さな命を創造してる気がしてやめられなくなつた」

夏の旅以来、動物をテーマにした創作に打ち込んでいた。美術系の大学の受験科目には造型の実技があつて、真琴はこれらの人形のいくつかを提示したはずだ。

「本物の野生動物を観察するために、いつかアフリカに行ってみたい」

春本が学んだというティンガティンガアートを制作する村を訪れるのだ、と目を輝かせた。

僕が出品するのは何点かのスケッチと、メインはボルトやナットでできた「象」のオブジェだった。道路に落ちている無数のそれらを、この半年拾い集めた。大きさや長さ、色や形、金属の種類に至るまでどれひとつとして同じものはない。もともとは車や自転車の部品として、何かの役に立っていた。ぽろりぽろりと外れて路上の塵芥と化していたものたちに、なぜか愛着を覚える。

ボルト・ナットの他にも路上で見つけた様々な部品を利用した。針金や鉄筋の切れ端、金属のメダルや釘といった物体だった。それらを接着剤でつなぎ合わせて象の形を作った。アフリカの草原を太い足で踏みつけて走り、水浴びしながら気持ちよさそうにいななく野性の象をイメージした。

「真一君らしい作品ができたね。一度はうち捨てられたものが、芸術作品に化けるってわけ」

「いらぬものなんか、たぶんこの世にはなんにもないんだと思います。それをどう活かすかっていうだけで」

象の体を構成する個々の部品たちは、僕の周囲の人々に見えた。愚かしくもけなげに生きている。個性が寄り集まって、象というひとつの街に暮らしていた。

「ネジひとつだって、何かになることはできる。縁の欠けたナットにだって、役目や使命がみつかるかもしれない。路上に落ちているゴミにも、輝きを取り戻す可能性は残されている。ただし、捨つてやる者が必要なんだと思う」

たまたま機械の一部として再起できることもある。かつてリヤカーを簡単に修理したみたいに。

そうじゃなくとも、美術作品の一部になる道さえ残されている。僕が言いたいのは、どんなものにも舞台はあるってことだ。うまく説明できそうにないけれど。

「君も自分の進路を見付けたみたいだね」
ポンコがうれしそうに顔をゆるめた。

この作品をつくりながら、僕の気持ちはしだいに変化していった。進むべき道を考え抜いた。我が身をミキサーにかけて、未知の芸術を追い求めることが唯一の選択肢ではなかった。ストイックな求道者の道が、はたして自分の生き方かという疑問がしだいに膨らんでいく。

真琴との約束が、しだいに大きく重く僕にのしかかりはじめた。二人して上京し、レベルの高い濃密な美術の世界で共に学ぶという計画は、いまだに魅力的であった。しかし、もっと身近に辿るべき経路が横たわっていることに、創作を通して気付いたのだった。

「真一君が思うようにすればいいよ」
年が変わる前に、心の中を去来する迷いをすべて打ち明けた。土壇場で裏切るようなことをしたくなかった。

「私もたぶん行かれない。ママのことがあるし」

真琴も決意と諦めの狭間で大きく揺れていた。

「どうなるかわからない。でも試験は全力でやっつけようよ」
僕たちは誓い合った。

志望校を決定し、入学試験に望むべき時期だった。煮え切らない自分の気持ちに苛立った。結局、僕は東京の美術系の大学を含むいくつかの志望先を選んだ。

真琴はたった一校、美大の彫刻科を背水の陣で受験した。試験の出来次第で、入学金および授業料を免除となる特待生の制度を持つ学校だった。全寮制の設備も備え、ほんとうに才能のある学生が経済的に恵まれなくとも安心して学べる唯一の場所だった。

寒波の中に沈む二月を、僕たちは慌ただしい受験期間として消化した。そして三月、すべての結果が出そろい、最終の進路を決定したところだった。

卒業式までの数日間のみの展示会が開催された。学内から大勢の見物客が訪れて、好評を博することができた。

「おおっ、すげえな」
透が丁寧に作品を鑑賞しながら言った。

「ほんとにこれ、三崎がつくったの？」

真琴の作品を前にして目を剥いた。手のひらに乗るサイズの小さな人形が並んでいる。

「ふうん」
雲行きが怪しい。

「なんだよ？」
身構えて天敵の罵詈雑言を待ち受けている。

「いいじゃんか。かなりいけてるし、おもしろえな」
拍子抜けした。

「売れるよ、これ。なあ、記念にオレにもひとつつくれないか？」

「やだ、ぜったいに。一個百万円」
勝ち誇った顔で鼻の穴を広げる。
「そんなけちなこと言うなよ、なあ、いいだろう」
これくれよ、と喋ってハスキー犬の人形をつまみ上げる。
「このやろう、さわるな。芸術作品だぞ」
またまた背丈のちがいがすぎるボクシングが始まった。
透は医学部の受験にことごとく失敗し、隣の予備校に入ることが決まっていた。やる気を無くしてぶらつく万引き少年の面影は、すでになかった。
「オレは医者になるよ」
いつも彼につきまといて不安定さは影を潜めていた。
「親に言われるから跡を継ぐってわけじゃない。オヤジにもそう言うてやった。自分の身勝手に家族を泣かせるような人間には、医者になどなる資格はないってな」
透は傷ついた母親の心を癒したいと考えていた。予備校のある街にも、母親と二人で引越すつもりだということ。
「生まれてはじめて医者になりたいって、自分が思うようになったんだ。授かった能力をすべてそれに傾けたい」
彼の精神の中で起きた化学変化は本物にちがいはなかった。
「難病の治療をやる。だから、待ってるよ。日下」
幸太に向かって真面目な顔で言った。
「ありがとう。でも、できたら早くしてくれな、浪人生」
分厚い眼鏡を曇らせている。
「ほんとだよ。肝心なところでドジ踏みやがって。来年こそは合格しろ。エースストライカーだろ」
真琴が透の腰をどすんと殴った。
「ウウ、きついね。どいつも。受験に失敗したオレを慰めようってヤツはいないのか？」
「自業自得！」
「因果応報！」
「輪廻転生？あれ、ちよつとちがうか」
口々に喋ってやった。がっくりと透は肩を落とした。
展示室の一番最後の場所には、春本の絵が飾ってあった。
「この絵は、いつ見てもやっぱすごいね」
全員が素直に頷いた。
太い前脚ですくくと立つハスキー犬の姿は、見る者すべてを魅了する。特別なオーラがキャンバスから立ちのぼっているのだった。
「シヨウヘイ・ハルモト？」
ポンコがミミズのようにのたくるネームを読んだ。
「知ってます？アフリカンポップアートですって」

ざんばら髪に髭もじゃの春本の顔を思い出した。青いスーパーカブに荷物を積んで、今も日本のどこかを放浪しているのだろうか。

「ネットで見えたことがあるわね。神出鬼没、放浪の天才画家だって。幸運を運ぶ奇跡の絵として、ちょっとした都市伝説になってる。たぶんこの絵、本物なら相当な値が付くはず」

顔を見合わせた。

「売ろう！」

真琴が唾を飛ばした。

「オレにも分け前をよこせよ。オレがエロ本と交換したんだからな」もう一度絵の中に立つハスキー犬の姿を眺めた。堂々として誇りに満ちた勇姿がそこにあった。何者にも汚されることのない孤高の魂が宿っている。

その絵と対峙することで、疑念や迷いがさらさらと浄化されていく。何も思い悩む必要はない。ためらう前にまず跳んでみせろ、とその絵は訴えている。

有限の時の流れに彷徨いながら、朽ち果てるまで夢を追い続ける。それしか道はない。したたかに未来を切り開いていけ、と温かい手が背中を押す。絵の持つ意味が、僕たちの胸の奥底にじんわりとしみ込んできた。

展示会最後の一日を、この絵の前でゆったりと過ごした。そして翌日、僕たちはそれぞれの高校時代を終えたのだった。

四月になり、僕は真琴と中央公園のベンチで待ち合わせた。並んで座った僕たちの頭上を、満開の桜が覆い尽くしている。

「しばらく会えないね」

寂しそうに言う。

「見送りに来ないでね。きっと泣いちゃうから。行けなくなったら困る」

真琴は明日の夜行バスで上京する。美大の彫刻科で本物の芸術を学び、プロの美術家になる覚悟だ。

「うん、元気でね。体、気をつけて」

僕は地元の教育大学への入学を、最終的に選んでいた。

教師となって生徒に美術を教えたかった。あるいは小さな父の画廊を継いでもいい。父と一緒に絵画教室を続けてみたい。日々の営みを楽しみながら、美術というこの素敵な世界を世に広めたい。そんな人生が、のんびり屋の自分には似合っている。

「私は新天地でめいっぱいがんばってみる。ママのことは気がかりだけど、自分がまずしっかり自分自身の足で立たなきゃって思うんだ。まちがってないよね？」

しっかりと頷いてやった。華やかな可能性に彩られた彼女の未来を

遮ることは、誰にもできないし、してはならない。

「彫刻をやりたい。本気でやってみるつもり。それで生計を立てられるようになったら最高」

夢を育む勇気を紡いでいた。

「できるさ。きみなら」

巢立とうとする雛鳥に向かってエールを送る。

「おだてないで。すぐに泣いて帰って来ちやうかも」

「いいさ。いつでも帰っておいで。僕はこの街にいるよ。たぶん、ずっとね。幸太も一緒だ」

「ありがとう」

右手で握手を求めてきた。握り返した手に力が込められる。

僕たちの恋は、あまりに淡く切なく儂い。だけど、まだまだどう転ぶかわかりやしない。だから、けして別れは口にしない。

そのとき、ざあっと音をたてて、気まぐれな春一番が吹き下ろした。咲き誇るしだれ桜の枝から離れた花びらが、僕たちの頭上にはらはらと降りかかる。やがて視界を隠すほどの花嵐となり、抜けるような春の青空で薄紅色の渦を巻いた。

この風は、旅の道中で見た川沿いのソメイヨシノの並木にも吹いただろう。ロープウェイのゴンドラから見下ろす、山肌いっぱいのもやまザクラにも届いたかもしれない。どの桜もいまやきつと満開で、命の素晴らしさを声高に謳っているにちがいない。

ハスキー犬が埋葬された桜の木から、ピンク色の花びらが驟雨となつて舞い散るさまを思い描いた。橋の下の赤いベンチで豪快に笑う放浪の画家の姿がなつかしい。

「さあ、出発だ」

僕たちの人生行脚は、今始まったばかりだ。

へ了へ